

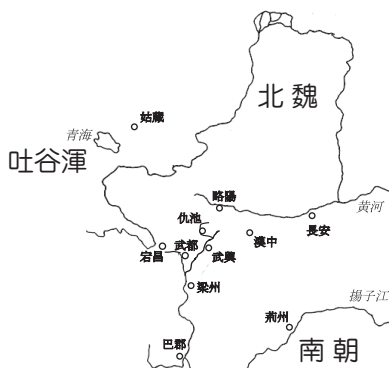
# 南北朝正史の沮渠蒙遜伝、 氏胡伝、宕昌伝訳注

菅 小  
沼 谷  
愛 仲  
語 男

## 目次

訳者のまえがき	114
『魏書』 卷九十九、沮渠蒙遜伝	116
『宋書』 卷九十八、大且渠蒙遜伝	127
『宋書』 卷九十八、氏胡伝	135
『南齊書』 卷五十九、氏伝、宕昌伝	148

訳者のまえがき（北涼、仇池、宕昌の歴史的役割について）



中国西北辺境要図（4～5世紀）

今回は、「南朝正史西戎伝と『魏書』吐谷渾・高昌伝の訳注」（小谷・菅沼二〇一三）に引き続き、魏晋南北朝時代の正史より、『魏書』沮渠蒙遜伝、『宋書』沮渠蒙遜伝、『宋書』氏胡伝、『南齊書』氏・宕昌伝を取り上げる。沮渠蒙遜の北涼と、前回の訳注（小谷・菅沼二〇一三・二二八～二三〇）で取り上げた『梁書』卷五十四、西北諸戎伝の氏族楊氏（仇池、武興）、羌族梁氏の宕昌は、いずれも交通の要衝に位置したため、北朝（北魏）も南朝（宋）も両国を重視した。沮渠蒙遜（在位四〇一～四三三）の本拠地姑臧（甘肅省武威）は河西回廊の中心に位置し、南北朝時代の西域と中国を結ぶ結節点であり、軍事上、経済上の要衝であった。戦略的、経済的要地に位置する北涼を、北朝（北魏）も南朝

（宋）も、そして北涼国（姑臧）自身も重視し、特に南朝は北魏を牽制するといふ外交上の目的から北涼の懐柔を試み、北涼に王号、爵号、將軍号を授与した。

また、蒙遜が曇無讖のパトロンとなって仏典の翻訳を支援したため、曇無讖は北涼で『大般涅槃經』『金光明經』などを漢訳した（小田義久一九六八、杜斗城一九九八）。このため北涼は訳経事業のセンターとなり、文化史上、仏教史上でも多大な貢献をした。氏族の楊氏（武興、仇池）は本拠地の仇池（甘肅省）にちなんで仇池国、もしくは武興国、武都国とも呼ばれる。仇池は南北両政権の中間に位置したため、北魏は仇池を経由して蜀に至る交通路を開拓する目的で仇池へ積極的に進出し、州や鎮を設けて直接統治を試み、宋は漢中（北魏が南下の際の進撃路）を防衛するため、漢中に隣接する仇池の掌握に尽力した（三崎良章一九八

六、三崎二〇〇六、北村一仁二〇〇九、三崎二〇一二）。また、宕昌国は羌の族長梁勲が王号を自称したのを始まりとし、宕昌（甘肅省宕昌県）を本拠とした。同地は、吐谷渾の東、益州（四川省成都）の北方に位置し、河西回廊と南朝を結ぶための交通路に相当したため、南朝は宕昌との交渉を重視した。

北涼と仇池は、南朝（宋、齊）にとって北魏を牽制するという外交上の目的からも重要であった。宋は、北涼、仇池、それに北方の柔然、青海の吐谷渾と連繋し、北魏包囲網を形成していた。吐谷渾は南朝と柔然との連絡路に相当し、吐谷渾を介した南朝・柔然の間の使節の往来は史書にも見える。南朝は、吐谷渾と通交するため仇池を経由したと思われる仇池は南朝と吐谷渾を介する要衝であったと推測される。南朝は、北涼や西域に至るためにも、仇池との関係を維持しようとしたと考えられる。なお、南朝（宋、齊、梁）は、北涼、仇池（武都）に王号、爵号、將軍号を授与したが、南朝（宋、齊、梁）は倭の五王に対しても將軍号、爵号を授与していたため、日本古代史の研究者、坂元義種氏（坂元一九六九、坂元一九七八）は、南朝（宋、齊、梁）が、五世紀に河南王（吐谷渾）、河西王（沮渠氏）、宕昌王、武都王（仇池・武興の楊氏）に授けた称号と、倭の五王の称号を比較検討している。

以上のように北涼、仇池、宕昌は、南北朝にとって軍事上、地理上、外交上、国際情勢上、非常に重要であった。

なお、今回訳注した氏伝と宕昌伝については『梁書』巻五四（小谷・菅沼二〇一三）と未訳の『魏書』巻一〇一にも同伝が存在する。ただ『魏書』巻一〇一の原文は、はやくに散逸し、現行本は唐代編纂の『北史』巻九六から機械的に復元したもので、『魏書』吐谷渾伝訳注の際に指摘したように、北史の外国伝は南朝系の史料（とりわけ『宋書』の記事）を取り込んで編纂しており、独自の史料価値が少ない。今回は『魏書』氏、宕昌伝の訳注を割愛し、参照するだけに止めた。今回の訳注に使用したテキストは中華書局出版の標点本である。そのほか『歷代各族伝記会編』第二編上、下冊、中華書局出版一九五八―九を随時参照した。

## 『魏書』卷九十九、沮渠蒙遜伝

胡人（匈奴）の沮渠蒙遜は本来、臨松廬水（張掖の南）の出身であった。その先祖が匈奴の左沮渠となったことがあったので、その官職を自分の氏族名としたのである。沮渠蒙遜は口先がうまく、臨機応変なところがあり、天文学の知識に精通していた。そのため諸胡たちから信頼を集めていた。呂光（後涼）が彼の伯父の西平太守羅仇を殺害したので、沮渠蒙遜は民衆一万余人を集め、金山に屯営し、従兄の晋昌太守男成とともに建康太守の段業を擁立して、使持節、大都督、龍驤大將軍、涼州牧、建康公とし、年号を神璽元年（三九七）と称した。段業は沮渠蒙遜を張掖太守に任命して臨池侯に封じ、男成を輔国將軍に任命し、軍事、国政の任務を委ねた。段業は自ら涼王を称し、沮渠蒙遜は心とした。しかし沮渠蒙遜の威望が大きいのを妬み、次第に敬遠するようになった。天興四年（四〇二）、沮渠蒙遜は心に不安を抱き、願ひ出て安西太守となり、ついで民衆を激怒させることを画策した。そこで蒙遜は、男成が反逆を企んでいると段業に虚偽の密告をし、段業は男成を殺害した。沮渠蒙遜は泣いて民衆に訴え、従兄のために復讐をしたいと決意を述べた。男成はもともと恩情の厚い人物であり、民衆は心から段業を恨み、奮起して、涙を流し、沮渠蒙遜の命令に従った。沮渠蒙遜はそれによって挙兵し、段業を攻撃して殺害した。自ら使持節、大都督、大將軍、涼州牧、張掖公の職務を行い、年号を永安と改め、張掖に拠点を構えた。

永興年間（四〇九～四一三）沮渠蒙遜は姑臧（甘肅省武威）を占領し、そこに根拠を遷し、年号を改め玄始元年（四一二）とした。そして自ら河西王と称し、百官丞郎以下を設置した。頻繁に北魏朝廷に使者を派遣して朝貢した。

沮渠蒙遜が新台（不倫関係の暗喩）で就寝していた時、閹人（宦官）の王懷祖が蒙遜に切りつけ、そのため足に傷を負った。沮渠蒙遜の妻の孟氏が王懷祖を捕えて斬殺した。沮渠蒙遜は、劉裕（後の南朝宋皇帝）が姚泓（後秦国王）を

殺害したことを聞いて激怒した。その時ひとりの校書郎がそのことを沮渠蒙遜に言上すると、「お前は劉裕が関中に攻め入ったことが、それほど嬉しいのか」と言つて、ついに殺してしまった。蒙遜の残酷さはそのようであつた。泰常年間（四一六～四二三）、蒙遜は李歆（西涼王）に戦勝し、ついで敦煌を滅亡させた。その後、承玄と改元した（四二八）。神鼎年間（四二八～四三二）、沮渠蒙遜は尚書郎の宗舒と左常侍の高猛を派遣して朝貢し、次のような上表文を奉つた。

「伏して思いますに、陛下は天性の叡聖にて、その徳は百王を超越し、その薰陶は二儀（天と地）と等しく、洪基は三代（夏殷周）より隆盛であります。しかるに、時勢は多難であり、畿外九服は乱擾し、天子の神旗はしばし覆われ、車軌、文字は同じでなく、天下が統一されておりません。しかしやがて上帝は助けを降し、天命は有徳の人に歸し、純風（美徳の教化）の鼓がひとたび打ち鳴らされれば、小人も顔つきを改めて、皇帝に従うでしょう。民衆は大いに幸せとなり、天下をあげて喜ぶでしょう。」

私はまことに弱才で、とりたてた功績ありませんが、幸いにして皇帝陛下の重光に巡り合い、身命を尽くしてお仕える所存であります。自らが老齢におよんでも、このような盛世を見ることができたことを喜び、このまま余生を終えることができれば幸いと願つております。皇帝陛下の寛大さに甘え、これまで何度も上表を奉りました。朝貢の使者は次々と出発しましたが、遠くに行つたまま、音信不通で誰一人戻ってきません。使者は行路の難所、道中の危険に精通せず、ついに朝廷に到達できなかったのか、あるいは天朝があまりにも高貴な存在で、朝貢使として取り扱ってもらえなかったためでしょうか。私は不安におののき、身のおきどころがございません。往年に侍郎の郭祇らが、詔書戴着いて帰国しました時、その際は三接の恩（丁寧な処遇）に浴し始め、万里のかなたの私の心にも信頼が生まれました。

今は、難局の名残もありますが、ようやく安泰の兆しが見え始め、入朝の勧誘が強まり、朝貢もますます求められてい

ます。年老いた私は遠隔の地にいながら、なお見捨てられず、仰いでは慍悌の仁（皇帝陛下の和らいだ気持ち）を受け、伏しては康哉の詠（太平の歌）を踏み踊りましょう。しかし最近、商胡（西域商人）たちがやって来て、公卿の書簡を差し出し、運命論、安危の機会を援引し、寶融の知命の美（後漢末の乱世に甘肅の和平を保った美事）を説いて私を励ました。顧みますに、私の願望はまことに深く恐れ慎むことです。それは何かといいますに、私には自立の気持ちはなく、遠く皇帝陛下の庇護に身を託し、ささやかながら忠誠心を奉り、陛下の恩情を受けたく思います。もし万国が朝廷に参詣し、諸侯が朝賀することになれば、私は真つ先に駆けつけ、前兆を真つ先に知る所存であります。ただ、今は情勢なお多難であり、私の願望を果たせずにあります。上表文を頻繁に差し上げておりますが、十分に気持ちを伝えできません。わが身を国許に置いては、真心を現すことができません。困惑を与える諸侯、憂慮をひきおこす公卿たち、その主張はてんでばらばらであり、重複を抑制するといえ、共同して補佐する仲間ではありません。北極星を周りの星が支えるような心境にいまだに到達しておらず、一隅に首を延し、四方のはずれを低回するだけです。

私が符瑞を歴観し天時を候察しましたところ、皇魏に過ぎたるものはなく、陛下を超えるものはございません。加えて天から授かった天子としての立派な姿、および幼年にして皇帝に即位されており、そのほめ歌は周の成王、康王と等しく、その徳化の度合いは漢の文帝、景帝を超えております。今まさに神綱を振るって天地四方を覆い、玄沢に注ぎ八荒を潤す。いわんや秦隴に塗炭の苦しみを経験し、今やただの老臣として忠誠を尽くす私にも恩恵を及ぼされんことを。」

その後、沮渠蒙遜は息子の安周を魏の朝廷に内侍として派遣した（四三二）。世祖は兼太常の李順に節を持して派遣し、沮渠蒙遜を飯節に任命し侍中を加え、涼州を都督させ、西域羌戎諸軍事、太傅、行征西大將軍、涼州牧、涼王とした。その冊書に次のように述べる。

「昔、わが皇祖の子孫は黄帝軒轅から始まり、多くの優れた人材を統御し、中華と夷狄を統治し、栄光を重ね、祖先を辱めなかった。太祖道武帝（三八六～四〇九）の治世に及んで、機運に順応し、大業維新して、天下を奄有し、天命を受けて（北）魏を建国した。ついで太宗（四〇九～四二三）の治世に及んで、国土を拡大し、和平の世と民の裕福を実現した。朕（世祖太武帝、四二三～四五二）は天子の位を継承し、国土を拡大しようとしたが、しかし時運は適さず、暗雲が四方を覆い、赫連勃勃（四〇七～四二五）が函谷関以西の地に跋扈し、大檀（柔然可汗、四一四～四二九）が漠北に跳梁し、戎夷は天嶮に身を潜め、江淮（南朝）はいまだ服従せず、そのため東奔西走して、軍隊もしばしば出動することになった。宗廟霊長のおかげにより、将士は力戦し、渠魁を殲滅し、獷賊を震服させた。四方もようやく安泰に向かい、内外ともに弊害はなくなった。

王よ、なんじはあらかじめ機運を認識し、深遠な経略をめぐらせ、朕に協力した。その功績は多大である。現在はまだに末世にめぐり合わせ、僭主が横行し、国土を有する者は自立しないものはなく、民を有する者は僭称を犯さないものはない。みな衆星拱極の道（周囲の星が北極星を支える）に遵わず、細流帰海の義（河海は細流を選ばない）を慕わない。その中で王よ、汝は物事の本質を深く悟り、みな制度文物にのっとり、土地の特産を献上し、愛子を朝廷に入侍させようとした。その勳義は顕著であり、善行美德が備わっている。思うに、王よ、なんじの祖父と父は国土を有し、民を有して、臣下の功德を論考褒賞する時は、当時、右に出るものはなかった。氏族の序列をいう時は代々の爵位にもとづいた。古より帝王が賢德者を褒賞する時は、かならず土地と人民を分与し、封建して藩屏とした。たとえば、周の成王が太公を東海に顕彰し、襄王が晋文公を南陽に啓行させたように。今ここに涼州の武威、張掖、敦煌、酒泉、西海、金城、西平の七郡を割譲して、王よ、なんじをその地に封じて涼王に任命する。ここに素土を授け、白茅を補い与え、それを用いて、宗廟を建て、（北）魏の藩屏となり、盛衰存亡は（北）魏と昇降をとみにせよ。それ、功績が高ければ、



爵位も尊く、徳行が厚ければ、官位も重いものとなるう。

さらに王よ、なんじを百官の長の補佐役とし、幃幄で謀議させ、領土拡大の野心を抱かなければ、なんじを侯伯に取り立てよう。なんじを太傳行征西大將軍として、鉞を杖とし、旄旗を持ち、河右（黄河の西方）に武勇を振るわせ、遠く王略を開かせ、辺境を懐柔させよう。北は窮髮（不毛の土地）の果てまで、南は庸、岷江を極め、西は崑崙山脈を覆い、東は河曲（オルドス地帯）にまで、なんじ王よ、これらの地を実際に征服し、もって皇室を扶輔してほしい。王よ、なんじに建国を命じよう。將相群卿百官を配置し、制度に従って任命し、文官は刺史以下、武官は撫軍以下を任命せよ。天子の旗旗を建立し、出入には、警蹕（先導）を用い、漢代初期の諸侯王の故事にならえ。

謹めよ、この先も、なんじの職責を全うし、謹んで朕の命令に服従し、天工に協調し、聖人君子の九徳をみな踏み行わせよ。百官を汚すことなく、終身にわたって顕徳を實行し、わが（北）魏の皇祖の立派な功績を大いに顕彰せよ。」

以上は崔浩<sup>①</sup>の起草した文章である。

沮渠蒙遜はまた改元し、義和元年（四三二）とした。北魏の延和二年（四三三）四月、沮渠蒙遜は死没した。北魏朝廷は使者を派遣し、葬儀を監護させた。沮渠蒙遜の諡号（おくり名）は武宣王という。沮渠蒙遜の性質は淫乱、忌嫉であり、刑罰において残忍であった。また家庭でもほとんど風範・礼節がなかった。

第三子牧健が王位を継いで、河西王と自称し、使者を派遣して北魏の朝命を請うた。これより先、世祖は李順を北涼に派遣し、沮渠蒙遜の娘を迎えて夫人としようとしていた。ところがたまたま蒙遜の死に会い、牧健は蒙遜の遺志を受けて、妹を京師に送り届けた。妹は右昭儀を拝命した。北涼は改元して永和元年（四三三）とした（資治通鑑卷一二二、四三三年四月条）。世祖はまた李順を派遣し、牧健を拜して使持節、侍中に任命し、涼・沙・河三州を都督させ、西域羌戎諸軍事、車騎將軍、開府儀同三司に任じ、西戎校尉、涼州刺史、河西王を領護させた。牧健は功績による授賞がな



いので、李順を北涼に留め置き、上表して安西もしくは平西將軍の称号を賜りたいと請うたが、ねんごろに詔を下して許可しなかった。牧健は世祖の妹の武威公主をめとり、その宰相の宋繇を派遣して表謝し、馬五百匹と黄金五百斤を献上した。宋繇はまた表を奉り、公主および牧健の母に妃后の称号を定めてほしいと請うた。北魏朝廷では議論して、「母は子を以て貴きとし、妻は夫の爵に従うという。牧健の母は河西国太后とし、公主はその国内では王后と称してよろしい。ただ、京師では従来通り公主と称すればいかがでしょうか」と答えた。詔を下し、それに従った。牧健はその將軍の沮渠旁周を派遣し、京師に参内させた。世祖は侍中の古弼、尚書の李順を派遣してその侍臣たちにそれぞれの地位に応じて衣服を賜与し、あわせて世子の封壇を召して入侍させようとした。そこで牧健は封壇を派遣して京師に参内させた。

太延五年（四三九）、世祖は尚書の賀多羅を涼州に派遣し、噂の真相を確かめさせた。その結果、牧健は北魏の藩屏と称し、朝貢を続けるけれども内実は背信行為が多かった。そこで世祖は北涼に親征することにした。公卿に詔を下し、牧健を詰問する書状を作らせた。

「王よ、なんじは北魏の正朔を奉しながら（北魏の臣民である）、内では身分不相応におごりたかぶり、僭称を放棄していない。それが罪の第一である。民籍地図を公府に提出せず、任土作貢（土地に応じて貢賦の品種と額を定める）を司農に納めていない。それが罪の第二である。すでに北魏より王爵を授与されながら、南朝からも同じ爵位を受け、両王朝を手玉に取り、両立しない寵愛を求めようとしている。それが罪の第三である。朝廷の志が遠方の民を招致することである（懷遠）と知りながら、その聖略に背き、商胡（西域商人）に過酷な税を課し、旅人の往來を断絶させる。それが罪の第四である。西域の人々に対し、自分の勢力を大言壮語する。それが罪の第五である。自分の領土に坐して自強をはかり、入朝しようとしな。それが罪の第六である。北は柔然（叛虜）と結託し、南は氏族の楊氏（仇池）を仲

間に引き入れ、吐谷渾（谷軍）と同盟し、お互いに提携して悪事を働く。それが罪の第七である。詔勅を受けながら、度を過ぎて征や鎮を授与する。それが罪の第八である。敵の無事を喜び、北魏の敗北を幸いとし、また王使を侮辱し、待遇に礼儀を欠く。それが罪の第九である。すでに北魏の帝室と婚姻を結び、その寵愛はそれまでの功績を超えたものであるのに、今、欲情をほしきままに、嫂（兄嫁）と淫らなことをする。それが罪の第十である。すでに夫婦の体裁を外れ、婚姻の義を尊重せず、公に酖毒を用いて、公主を殺害しようと図った。それが罪の第十一である。王使の防備、関要の候守に、それが仇であるがごとくみなす。それが罪の第十二である。

臣下としてこのようであれば、どうして許されるであろうか。最初に命令を下し、それが聞きいれられなければ、その後に誅罰する。それが王者の道である。もし王が自ら群臣たちを率いて委贄（東ねたほし肉を地面に置く）して郊外にまで出迎え、皇帝の馬首に拝謁すれば、それが上策である。皇帝の六軍がすでに王城に臨み、その時になって後ろ手に縛り、棺を背負って降伏する（面縛輿櫬）ならば、それは次策である。もし窮城を守迷して悔悛する時機を失すれば、自身の死のみならず一族皆殺しとなり、前例のない大殺戮となる。以上のうち自分にとって最善の策を選択するがよい。」

北魏の軍隊が黄河を渡りきると、牧犍は「何故このような事態になったのか」といった。左丞の姚定国の計略により、あえて城から出て迎えようとはせず、蠕蠕（柔然）に救いを求めた。また、弟の董来に兵一万余人をひきいて都城南郊で北魏軍に応戦させたが、敗退した。皇帝の車駕は姑蔵（武威）まで到達すると、使者を派遣して牧犍に城から出てくるように諭した。牧犍は蠕蠕が北魏領内の善無（平城の西）に侵攻し、幸いそのため世祖太武帝が退却したことを聞き、籠城自守を決め込んだ。しかし牧犍の兄の子、祖が城を脱出して降伏してきたので、城内の実情がごとく知られ、そこで世祖はふたたび軍隊を率いて進攻した。牧犍の兄の子、万年が部下を率いて降伏してきた。城は陥落し、牧犍は

左右の文武官らとともに、面縛請罪（後ろ手に縛り、罪の許しを請う）し、降伏した。詔を下し、その縛めを解かせた。涼州の民三万余家を京師（山西省大同）へ強制徙住させた。

それより前のこと、太延年間（四三五～四三九）、一人の父老が現れ、書状を敦煌城の東門に投げ込み、忽然と姿が見えなくなった。その書状一紙には八字が記されていた。「涼王三十年、もしくは七年」と。また落雷の跡から見つかった石には、丹書で「河西、河西は三十年、もし帶石を破壊すれば、七年の治世」と。帶石とは山名で、姑藏（武威）の南にあった。その山祠の傍らが土石流で埋まり、通行不能であった。牧健は征南大將軍の董来に言った。「祠に知覚などあるものか」と。ついに祠堂を破壊し、木を伐採して道を通じさせ前進した。牧健が即位して果たして七年目で滅亡した。まさに予言の通りとなった。

牧健は嫂（兄嫁）の李氏（尹）と不倫の関係をもち、兄弟三人もつぎつぎと彼女を愛妾とした。李氏と牧健の姉が共謀し、公主（世祖の妹）を毒殺しようとした。世祖太武帝は解毒医師を馱伝の馬によって公主を救わせ、一命を取りとめた。世祖は李氏（尹）を召喚したが、牧健は引き渡すことをせず、李氏を酒泉に移し、手厚く待遇した。世祖はたいそう立腹した。世祖はやがて北涼を征服したが、牧健に対してなお妹婿として待遇した。その母が死ねば、王太妃の礼でもって葬儀を営ませた。また故沮渠蒙遜のためには墓守として三十家をあてがった。改めて牧健に征西大將軍を授け、王の地位はもとのままとした。

それよりさき、官軍（北魏軍隊）がまだ北涼の国都に侵入を開始する以前、牧健は人を使って府庫の扉を叩き壊させ、そして金銀珠玉、および珍奇の器物をとりだし、そのあと、扉を開けたまま放置した。民衆の幾人かが府庫に盗みに入り、宝物の大きさを問わず、ことごとく持ち去ってしまった。北魏の役人が盗人をとらえようとしたが、不可能であった。真君八年（四四七）、盗人の知り合いや宝物を守蔵するものが密告してきた。世祖はその事実を徹底的に糾明し、盗人

たちの家を検索し、隠匿していた器物をすべて回収することができた。また、牧健父子が毒薬を多く蓄え、それを使って秘密裏に百あまりの人を毒殺したと告げるものがあり、さらに牧健の姉妹はみな左道を実践し、集団で淫乱行為を行い、恥じる様子がないという。さかのほれば、鬬賁（ガンダーラ）の沙門、曇無讖が東方に旅して鄯善に入国した。そして自ら「鬼神を駆使して病気を治療し、婦人を多産にすることできる」という。鄯善王の妹の曼頭陀林と私通し、それが発覚して涼州に逃亡してきた。沮渠蒙遜は彼を寵愛し、「聖人」と呼んでいた。曇無讖は男女交接の術を婦人たちに教授した。沮渠蒙遜の娘たち、息子の妻たちは、みな曇無讖の手ほどきを受けた。世祖太武帝は旅人から曇無讖の術のうわさを聞き、曇無讖を召そうとしたが、沮渠蒙遜は曇無讖を差し出そうとしなかった。しかしやがて曇無讖の所行が暴露されると、訊問の末、殺害してしまった<sup>(2)</sup>。世祖はそのことを聞き知ると、昭儀沮渠氏（牧健の妹）に死を賜い、その一族を誅殺した。ただ、万年と祖の二人は早くに降伏していたので免れることができた。

この年、ある人が牧健はなお北涼時代の旧臣民と交流しあつて謀反を企てていると密告したので、司徒の崔浩に詔を下し、妻の公主邸宅で死を賜わらせた。牧健は公主と長い時間をかけて訣別の辞をのべたあと、自殺を遂げた。葬儀は王礼で行い、諡を哀王とした。公主が死没した時、詔を下して牧健と合葬させた。公主には男子がなく、女子だけであつたが、国甥（皇室の女婿）が親しく寵愛されていたので、その女性に母の爵位を踏襲させて武威公主とした。

沮渠蒙遜の子の乗は、あざなを季義といつた。世祖太武帝は、その父が沮渠蒙遜であるということで東雍州刺史に任命した。乗はひねくれもので、事をおこしやすい性格であつた。太平真君年間（四四〇～四五二）、ついに河東蜀の薛安都とともに謀反を図り、捕えられて京師に連行され、その兄弟に引き渡し、扼殺させた。万年と祖とは早くに降伏してきたことで、万年は安西將軍、張掖王を、祖は広武公を拝命していた。万年は後に冀・定二州刺史となつたが、やはり謀逆の罪に連坐し、祖とともに処刑された。

そのさき、牧犍が北魏軍に敗北した時、牧犍の弟で楽都太守であった安周は南方の吐谷渾のもとへ亡命した。世祖は鎮南將軍の奚眷を派遣して討伐させた。牧犍の弟で酒泉太守の無諱は晋昌（瓜州）へ奔走した。そこで世祖は弋陽公の元瓘に酒泉を鎮守させた。太平真君の初年（四四〇）、無諱が酒泉を包囲した。元瓘は無諱を軽視し、城を出て話し合いに応じ、無諱に捕われてしまった。元瓘の部下たちは団結して籠城固守したが、無諱はなおも包囲を続けたので、やがて食糧が尽き、無諱によって陥落させられた。無諱はまた張掖を包囲したが、征服することができず、臨松に退却し、やがて晋昌に還った。世祖は詔を下し、無諱を慰諭した。当時、永昌王の健が涼州に鎮守しており、無諱はその中尉の梁偉を健のもとに派遣し、酒泉を奉還したいと申し出で、また捕えていた元瓘およびその統帥兵士を健の軍に送還した。太平真君二年（四四一）春、世祖は兼鴻臚に節を持たせ、無諱を征西大將軍、涼州牧、酒泉王に冊立した。ついで、無諱がふたたび叛逆を企てたことを理由に、また鎮南將軍と南陽公の奚眷を派遣して酒泉を討伐し、征服した。無諱はついに流沙を横断して逃亡することを考え、まず安周に西方の鄯善を攻撃させた。鄯善王は恐懼して降伏しようとしたが、たまたまそこに北魏の使者が居合わせ、説得して拒守させた（『魏書』西域伝、鄯善国条）。安周は波状攻撃をかけたが、ついに降伏させることができず、退却して東城に陣取った。三年（四四二）春、鄯善王の比龍は西の且末へ逃亡した。その世子は安周に服従し、鄯善は大混乱に陥った。無諱はついに流沙を渡り終えたが、士卒の大半が渴きで死亡した。無諱はようやく鄯善に拠点を築くことができた。

これに先立って高昌太守の闕爽が李宝（西涼王李暠の孫）の舅の唐契によって攻撃された。ちょうど無諱が鄯善に到達したことを聞き、使者を派遣して偽りの降伏をした。それは無諱と唐契を互いに戦わせようとしたからである。無諱は安周を鄯善に留めおいて、焉耆を経由して東北の高昌に向かった。たまたま蠕蠕が唐契を殺害してしまった。闕爽が無諱の進撃に対して防戦にあたったが、無諱は衛興奴を派遣し、偽って闕爽を誘い出し、ついに城を全滅させた。闕

爽は蠕蠕へ亡命し、無諱は高昌に留まった。五年（四四四）夏、無諱が病死し、代わって安周が高昌王となったが、その後、蠕蠕国によって併合された。

編者（史臣）がいう。周の徳が衰退し、戦国の七雄が競って対峙し、中国はみな分裂状態となり、それぞれの勢力が天子の座を伺った（睥睨尊極）。こうして、前涼の張寔などになると、中華と夷狄の境界に介在した。その地は実にかつての西戎住地であった。大いに勢い強大さを競いあい、内心では傲慢さを抱いていた。それぞれ自分の限度を知らないことは、これほど甚だしいものはない。蛇虺が共食いして、最後には捕らわれて殺されるのも、仕方のないことであろう。

## 注

（1）沮渠蒙遜の北凉国の存亡に大きくかわった重臣に、この崔浩と李順の二人がおり、『魏書』卷三五と卷三六の兩人の列伝には、本伝には見えない記述がある。李順は沮渠蒙遜のもとに前後十二回使者として赴いており、現地の地理、北凉国の内情に詳しくかった。しかし沮渠蒙遜の巧みな独立工作に丸められて、正しく朝廷に実状を報告しなかったおそれがある。世祖太武帝が沮渠蒙遜の死後、北凉討伐を企てた時、李順らは北凉（姑藏）周辺には水草が乏しく、軍馬の維持が不可能として遠征に反対した。しかし崔浩は『漢書』地理志をひいて、水草は豊富であり、李順らは北凉側からわいろを受け取っていると非難した。結果的には崔浩の意見が正しく、北魏は北凉を滅亡させ（四三九）、以後、西域貿易の利権は北魏に掌握されることになった（前田正名一九六九に詳しい）。

（2）曇無讖についての仏教側の資料は、『出三藏記集』卷一四、『高僧伝』卷二に存在する。本伝とは異なる曇無讖の仏教僧としての業績が記述されている。『高僧伝』の翻訳は吉川忠夫・船山徹二〇〇九、第一冊二一一～二三五頁。



## 『宋書』 卷九十八 大且渠蒙遜伝

大且渠蒙遜は張掖の臨松廬水の胡人であった。匈奴には左且渠と右且渠の官職があり、蒙遜の祖先がこの官職につき、羌族の酋豪は「大」と呼ばれた。それ故、且渠はその爵位からとった氏族名であり、それに酋豪の「大」を頭に付けたものである。代々、廬水（黒河）の流域に居住して酋豪となっていた。蒙遜の高祖の暉仲帰と曾祖父の遮はどちらも雄健で、勇名をはせた。祖父の祁復延は（東晋から）狄（北）地王に封ぜられた。蒙遜の父法弘はその爵位を踏襲し、前秦の苻氏は蒙遜の父を中田護軍に任命した。

蒙遜は、父に代わって部曲（私兵、部民）を領有した。蒙遜は勇氣、智略があり、利害損得の判断にたけ、諸胡から信望を得た。呂光（後涼太祖、三八六～三九九）は涼州（武威）において自ら王と名のり、蒙遜に宮人（私兵）を率いさせ、箱直（宮殿の警護）にあたらせた。また蒙遜の叔父、羅仇を西平太守とした。東晋安帝の隆安三年（三九九）春、呂光は息子の鎮東將軍の纂に羅仇を率いさせ、枹罕虜の乞佛乾帰を討伐させた。しかし乾帰によって撃退させられた。呂光は、敗北の罪を羅仇になすりつけ、殺害した。四月、蒙遜は羅仇の遺骸を貰い受けて還り、葬儀をとりおこなった。蒙遜は万余人を結集し、呂光に対して反乱を起こし、臨松護軍（の馬遂）を殺害して金山に立てこもった（『晋書』呂光伝）。しかし、五月、呂光は纂に指揮し、蒙遜を撃破させた。蒙遜は六、七人をつれて山中に逃げ、一族はみな死亡あるいは離散してしまった。

その時、蒙遜の兄の男成は兵を率いて西方の晋昌（甘肅省安西県東）の守備にしていたが、蒙遜が反乱を起こしたと聞くと、軍隊を率いて帰還し、酒泉太守の暉滕を殺害し、建康太守の段業を首領に推した。段業は自ら龍驤大將軍、涼州牧、建康公と名のり、男成を輔国將軍に任じた。男成および晋昌太守の王徳は張掖を包囲し、城を陥落させた。そ



こで段業は本拠地を張掖に移した。蒙遜も部曲を率いて段業のもとに身を投じたので、段業は蒙遜を鎮西將軍、臨池太守に任じ、王德を酒泉太守とした。ついで、また蒙遜に張掖太守を兼領させた。三年（三九九）四月、段業は蒙遜に一万の兵を率いさせ、西郡（甘肅山丹県）にいた呂光の弟の子、純を攻撃させた。十日を費やしても戦果はなく、そこで水を引き、城を水攻めにしたところ、純は窮迫して降伏を願い出た。純を捕虜とし凱旋した。そのころ、酒泉太守の王德が段業に対して反乱を起こし、自ら河州刺史を名のった。段業は蒙遜に西方の王德を討伐させ、王德は城に火を放つて、部曲を率いて晋昌太守の唐瑤のもとへ亡命した。蒙遜は王德を追跡し、沙頭（玉門の西北）で追いつき、大敗させると、純の妻子や部民を捕虜にして凱旋した。蒙遜は西安太守に転任したが、鎮西將軍の地位はもとのままであった。四年（四〇〇）五月、蒙遜は男成とともに段業の殺害を謀ったが、男成は許可しなかった。そこで蒙遜は逆に段業に対して男成が謀反を企てていると偽りの密告をし、そのため段業は男成を殺害してしまった。蒙遜は部下たちに向かって言った。「段業どのは無道にも、輔国の任にあった男成を無実の罪で殺害した。私は輔国將軍のために復讐を遂げようと思う」と。ついに挙兵し、張掖を攻撃し、段業を殺害し、自ら車騎大將軍と名のり、永安元年の年号を創始した（四〇一年）。この月（資治通鑑によれば、東晋隆安四年十一月）、敦煌太守の李嵩もまた挙兵し、自ら冠軍大將軍、西胡校尉、沙州刺史と名のった。敦煌太守の地位はもとのままであった。庚子元年の年号をたて、蒙遜に対抗した。その冬、李嵩は唐瑤および鷹揚將軍の宋繇を派遣して酒泉を攻撃させ、酒泉太守の大且渠益生を捕縛した。益生は蒙遜の叔父であった。呂光が死去して、息子の纂が即位したが（三九九）、永安元年（四〇一）、従弟の隆によって篡奪された。姚興（後秦主、三九四―四一六）が涼州を攻撃すると、呂隆は臣下と称して降伏を願いだ。蒙遜（張掖居住）もまた使者を姚興のもとに派遣した。姚興は蒙遜を鎮西將軍、沙州刺史、西海侯に任じた。二年（四〇二）二月、蒙遜は西平（青海省西寧市）虜の秃髮儼檀とともに涼州を攻撃し、逆に呂隆によって撃破された。十月、儼檀は再度、呂隆を攻撃し

た。三年（四〇三）三月、呂隆は蒙遜と俥檀がかわるがわる攻撃を仕掛けるので、呂隆の弟の超を姚興のもとに参内させ、救出してほしいと願ひでた。七月、姚興は武將の齊難を派遣して呂隆を救出させた。隆は齊難に蒙遜を討伐するように説得した。蒙遜はそれを聞いて恐れ、弟を人質として齊難のもとに差し出し、宝貨を献上したので、その作戦は中止された。齊難は武衛將軍の王尚を行涼州刺史に任命して、後秦へ帰国した。

義熙元年（四〇五）正月、西涼の李嵩は改めて大將軍、大都督、涼州牧、護羌校尉、涼公と自称した。五月、李嵩は酒泉に本拠を移した。姚興は南涼の秃髮俥檀に涼州刺史を仮称させ、王尚に代わって姑藏（涼州）に駐屯させた。二年（四〇六）九月、蒙遜は李嵩を襲撃しようと、安彌にまで至った。酒泉城まで六十里のところであつた。そこで李嵩は初めて襲撃に気づき、軍隊を出動して応戦したが、大敗して退却し、城門を閉ざして籠城した。蒙遜もまた一旦、引きあげた。六年（四一〇）、蒙遜は秃髮俥檀を撃破し、俥檀は姑藏から楽都（青海省楽都県）に逃れ、そこでたてこもった。その後、武威人の焦朗が姑藏に入り、自ら驃騎大將軍と名のり、西涼李嵩の臣下となつた。八年（四一二）、蒙遜は焦朗を攻撃して、これを殺害し、姑藏（武威、涼州）を本拠とし、自ら大都督、大將軍、河西王と名のつた。玄始元年と改元し、息子の正徳を世継ぎ（世子）とした。

十三年（四一七）五月、李嵩が死去し、その子の歆が即位した。六月、歆が蒙遜を討伐しようと建康（酒泉の東南、高台县）にまで至ったが、蒙遜に撃退され歆は敗走した。蒙遜は西支澗にまで追跡したが、逆に大敗を被り、死者四千余人を出した。そこで残余の兵を収容し、建康城を増築し、そこに守備兵を駐屯させ、帰還した。十四年（四一八）、蒙遜は使者を（東）晋の朝廷に参内させ、上表文を奉り、藩臣となることを願ひ出た。東晋朝廷は蒙遜を涼州刺史とした。

宋の高祖（劉裕、四二〇～四二二）は即位すると、李歆（西涼）を使持節、都督高昌・敦煌・晋昌・酒泉・西海・玉

門・堪泉七郡諸軍事、護羌校尉、征西大將軍、酒泉公とした。永初元年（四二〇）七月、蒙遜は東方の浩亶（南涼の本拠、楽都付近）を攻略した。しかし李歆がその虚に乗じ、張掖を攻撃してきた。蒙遜は軍隊を引き返し、西に帰還したので、李歆は退走した。李歆を追跡して臨沢（張掖の西）に至り、そこで歆の兄弟三人を斬殺した。さらに酒泉へ進攻し落城させた。その後、李歆の弟の敦煌太守恂が敦煌郡に自立し、自ら大將軍を名のった。十月、蒙遜は世子正徳を派遣して李恂を攻撃させたが、降伏させることができなかった。三年（四二二）正月、蒙遜は自ら出征して長い距離にわたって水路を築きあげ、城を水攻めにした。十日を過ぎても落城しなかった。しかし三月になって、李恂の武衛將軍の宋承と広武將軍の張弘とが城を挙げて蒙遜に降伏し、恂は自殺した。李氏（西涼）は遂に滅亡した。ここにいたって鄯善王の比龍が宋朝廷に参内してきたので、西域三十六国がみな宋朝の臣になることを願って朝貢することになった。

宋高祖（劉裕）は蒙遜を使持節、散騎常侍、都督涼州諸軍事、鎮軍大將軍、開府儀同三司、涼州刺史、張掖公に任命した。十二月、晋昌太守の唐契が叛乱したので、蒙遜はふたたび正徳に唐契を討伐させた。景平元年（四二三）正月、これに戦勝し、唐契は伊吾に亡命した。八月、芮芮（ジュウゼン）が来寇したので、蒙遜は正徳に応戦させた。しかし正徳は輕騎だけで応戦し、軍は敗北し、正徳は戦死した。そこで蒙遜は次男の興国の世子とした。この年、宋朝は蒙遜を侍中、都督涼・秦・河・沙四州諸軍事、驃騎大將軍、領護匈奴中郎將、西夷校尉、涼州牧、河西王に昇格させ、開府持節の地位はそのままとした。

宋太祖（文帝、四二四～四五三）の元嘉元年（四二四）、枹罕虜の乞佛熾槃が紹渠谷を出て、河西の白草嶺を攻撃したので、臨松郡一帯はみな熾槃の手中に陥った。熾槃は蒙遜の従弟の成都、従子の日蹄と頗羅などを捕虜とし、帰還した（『資治通鑑』元嘉元年七月条）。三年（四二六）、宋朝は蒙遜の称号の驃騎を車騎と改めた。蒙遜は世子の興国を宋朝に派遣し、上表文を奉り、『周易』および子・集部の諸書をいただきたいと申し出た。太祖文帝はそれらをみな下賜

した。合計四七五冊であった。蒙遜はまた司徒の王弘に対して『搜神記』を求め、王弘は書写して与えた。

六年（四二九）、蒙遜は枹罕（甘肃省臨夏市）に遠征した。その時、乞佛熾槃はすでに死没し、代わって子の茂蔓（四二八～四三一、晋書の慕容）が蒙遜の軍隊を大破させ、興国を捕虜とし、三千余人を殺害した。蒙遜は興国を身請けするために茂蔓に穀物三十万斛を送ったが、結局、茂蔓は興国を引き渡さなかった。蒙遜はそこで興国と同母弟の菩提を世子にたてた。しかし宋朝はまだそのことを知らず、七年（四三〇）、宋朝は興国を冠軍將軍、河西王世子とした。その年の夏四月、西虜の赫連定（大夏王、四二八～四三一）は索虜拓跋燾（北魏太武帝、四二三～四五二）によって撃破され、上邽（甘肃省天水県）へ逃走した。十一月、西秦の茂蔓は赫連定が敗北したことを聞き、家戸（部民）と興国をひきつれ、東征して上邽に住地を移そうとした。八年（四三一）正月、南安（甘肃省隴西）にまでたどり着いた。しかし赫連定が衆兵を率いて茂蔓の侵入を阻止し、これを大破させた。赫連定は茂蔓を殺害し、興国を捕虜とし、上邽へ連れ帰った。四月、赫連定は拓跋燾の攻撃を避けるため、黄河を西に渡り、蒙遜を攻撃しようとした。五月、赫連定は部曲を率いて治城峡口に至り、河を渡り始めたが、河の中ほどまで来た時、吐谷渾の慕璜が待ちうけて攻撃したので、捕虜になった。また興国は負傷し、数日後に死亡した。

九年（四三二）、宋朝は菩提を冠軍將軍、河西王世子とした。十年（四三三）四月、蒙遜が死没した。年は六十六歳であった。内輪で諡を武宣王とした。菩提はまだ幼年であり、その時、蒙遜の第三子の茂虔（魏書の牧健）が酒泉太守であったので、国衆は協議して茂虔を北涼の国主に推挙し、蒙遜の爵位称号を踏襲させることにした。十一年（四三四）、茂虔が上表文を奉った。「私が聞きますに、功績は万民を救済することが最高であり、それは竹帛（史書）によらなければ、功德を後世に残すことができないと。また名声は実際の通りであることが美点であり、諡号（おくり名）がなければ、人は有終の美を飾れないと。私の父、蒙遜は西方において涼州城を復興し、崑崙の末裔に恩沢を与え、多数

の乱賊を平定し、中華天下を整美にしました。ちょうど良き時勢に巡り合い、宋朝の重臣に加わり、爵位は九服辺境の者にも班与され、長らく王爵を享受しました。その功績と名声は顕著であり、貞節を固く守りました。天寿を全うできたのも正当といえます。しかし諡号（おくり名）を誰にお願いすべきかがわからず、業績は偉大であるといえ、命名に不備があるのではないか、子の私は悩み、不安に感じております。いま謹んで諡号の付け方を案じ、素案を考えました。父蒙遜は禍乱をよく平定したので、「武」というにふさわしく、また天子の命令によく従い、よく下達したので、「宣」がふさわしく、父蒙遜は黄河の西方を平定し、その勲功は天府に輝き、広く人々に知らしめ、顕彰するには、この二字がその目的にかなっております。そこで「武宣王」の諡号を贈りたいと思います。もし天聴がお聞き届け下され、それを史書に記していただければ、使者も遺族の私どもも、何も恨むところはございません。」それに対して詔が下された。「使持節、侍中、都督秦・河・沙・涼四州諸軍事、車騎大將軍、開府儀同三司、領護匈奴中郎將、西夷校尉、涼州牧、河西王の蒙遜は文武の才を兼ねそなえ、勲功は西方征服を果たしたことにあり、万里のかなたにあり、早くから忠誠心が顕著であつた。まさに忠誠と果敢さにより、われわれの遠大な計略を補佐し、宣揚してくれた。その人がにわかに死去し、こころは悲しみと悼みで一杯である。ただちに使者を派遣し、死者を悼み、その霊を祭らせよう。あわせて名譽ある諡号を贈ろう。嗣子の茂虔は先代の輝かしい業績とその方法を継承しようとし、その気持ちはますます明らかである。今後、宋朝の寵愛を蒙り、この蕃国としての業務を引き継ぐがよい。よって（使）持節、散騎常侍、都督涼・秦・河・沙四州諸軍事、征西大將軍、領護匈奴中郎將、西夷校尉、涼州刺史、河西王の称号を認可する。」

河西人の趙瞰は曆法・算術に長けていた。十四年（四三七）、茂虔は上表文を奉り、特産物を献上し併せて以下の書籍を献上した。『周生子』十三卷、『時務論』十二卷、『三国總略』二十卷、『俗問』十一卷、『十三州志』十卷、『文檢』六卷、『四科伝』四卷、『燉煌実録』十卷、『涼書』十卷、『漢皇德伝』二十五卷、『亡典』七卷、『魏駁』九卷、『謝艾集』

八卷、『古今字』二卷、『乗丘先生』三卷、『周髀』一卷、『皇帝王歷三合紀』一卷、『趙叡伝并甲寅元歴』一卷、『孔子讃』一卷、以上合計一五四卷であった。茂虔はまた『晋・趙起居注』等の諸雜書数十件を請求し、文帝はそれらを賜与した。

十六年（四三九）閏八月、拓跋燾（北魏太武帝）が涼州を攻撃した。茂虔の兄の子の万年が捕虜となり、北魏に内通したため、茂虔は北魏に捕えられた。しかし、すでに茂虔の弟の安彌県侯の無諱は先に征西將軍、沙州刺史、都督建康以西諸軍事、酒泉太守になっており、また第六弟の武興県侯の儀徳は征東將軍、秦州刺史、都督丹嶺以西諸軍事、張掖太守となっていた。拓跋燾（太武帝）はすでに茂虔を捕縛すると、軍隊を派遣して儀徳を攻撃させた。儀徳は張掖城を放棄して無諱のもとに奔走した。そこで、無諱と儀徳とは一族（家戸）をひきつれて、西方にいた従弟の敦煌太守の唐兄のもとに身を寄せた。拓跋燾は（北魏）將士を武威、酒泉、張掖に駐屯させて帰還した。

十七年（四四〇）正月、無諱は唐兄に敦煌を守らせ、自らは儀徳とともに酒泉を征伐し、三月、これを占領した。また張掖と臨松とを攻撃し、四万余戸を獲得し、引き返して酒泉を本拠とした。十八年（四四一）五月、唐兄が反乱を起こし、無諱は従弟の天周を酒泉に留めて守らせ、ふたたび儀徳とともに唐兄の討伐にむかった。唐兄は万余人を率いて応戦したが、これを大敗させ唐兄を捕えて殺害した。ふたたび敦煌を本拠とした。七月、拓跋燾は軍隊を派遣して酒泉を包囲した。十月、酒泉の城内は飢餓状態になり、万余人が餓死した。天周は自分の妻を殺し、戦士に食べさせたが、食料は尽き果て、城は陥落した。天周は捕えられて平城に送られ、殺害された。当時の虜兵（北魏の軍隊）の勢力は強盛で、無諱は人々が飢えるのを見て、自滅することを恐れ、人々を率いて西方へ移動しようと考えた。十一月、弟の安周ら五千人を派遣して鄯善を征伐させた。鄯善は固守して降伏しなかった。十九年（四四二）四月、無諱は自ら一万余家の人々をひきつれ、敦煌を放棄して、西方（鄯善）にいる安周のもとに身を寄せた。彼らがまだ到着しないうち



に鄯善王の比龍は四千余家の人々をひきつれて逃亡したので、無諱たちは鄯善に居留することにした。

それより以前、唐契（西涼の末裔）が晋昌（安西県）から伊吾（ハミ）に亡命していたが、今年になって高昌を攻撃してきた。高昌城主の闕爽が無諱に危急を告げ、救いを求めた。八月、無諱は従子の豊周を鄯善に留めて守らせ、自らは私兵を率いて救援に赴いた。まだ到着しないうちに、芮芮（ジュウゼン）が軍隊を派遣して高昌を救済し、唐契を殺害し、唐契の部曲たちは無諱のもとに亡命してきた。九月、無諱は部将の衛裔を派遣して高昌を夜襲させ、闕爽は芮芮（ジュウゼン）のもとへ亡命した。そこで無諱はまた高昌に依拠することになった。

無諱は常侍の氂僞を使者として宋の朝廷に派遣し、上表文を奉り特産物を献上した。太祖文帝は詔を下し、次のように述べた。「さきに狡猾な虜（北魏）は思うがまま涼国を侵害し、西河王の茂虔はついに對抗しきれずに逆賊の手に陥った。且渠茂虔らは代々、宋朝に対して顯著に忠誠心を示してきたので、心から哀悼の念を表する。次弟の無諱はよくその遺業を継承し、辺境の一隅に依拠して、外は隣国と友好関係を結び、内は民衆を安養し、たえず宋の朝廷を頼みとし、朝貢を怠ることはなかった。よって朝命を加え、その勲功を顕彰しよう。（使）持節、散騎常侍、都督涼・河・沙三州諸軍事、征西大將軍、領護匈奴中郎將、西夷校尉、涼州刺史、河西王の称号を認可する。」

無諱が死没すると、弟の安周が即位した。二十一年（四四四）、詔を下して次のように述べた。「故征西大將軍、河西王無諱の弟の安周は才略があり、用意周到で、歴代忠誠をつくし、先人の遺業を継承し、民衆は帰服している。亡命の身で、軍隊を喪失し、辺境に孤立無援の状況にあるとはいえ、残余の人々を收容し、侵略者たちを撃退するのは今後の仕事である。ここに榮譽を与え、祖先の立派な遺業を継承するようにと願う。使持節、散騎常侍、都督涼・河・沙三州諸軍事、領西域戊己校尉、涼州刺史、河西王の称号を認可する。」宋朝の世祖（孝武帝劉駿）大明三年（四五九）、安周は特産物を献上してきた。



## 『宋書』卷九十八、氏胡伝

略陽（甘肅省天水市付近）の清水氏の楊氏は、秦漢以降、代々隴右に住む豪族であつた。後漢の獻帝の建安年間中（一九六―二二〇）、楊騰というものがおり、部族の大帥をつとめていた。楊騰の息子の駒は、勇敢で壮健な人物で、計略に長け、初めて仇池（甘肅省成県）に移り住んだ。仇池の地は、百頃四方の広さで、百頃を号としていた。四方は険しい断崖で囲まれ、平地は二十余里四方であつた。そこへは三十六曲りの羊腸の山道を登らねばならなかつた。山の上には豊かな水源があり、土を煮て塩を得ることができた。駒の後、千万という名の人物がいた。三国時代の魏は、千万に百頃氏王を拜した。千万の子孫で成龍という名の人物は、次第に強盛となり、西晋の武帝から征西將軍の称号を与えられ、（先祖の故地であつた）略陽に帰り、同地に住んだ。成龍には子供がいなかつたので、外甥の令狐氏の子を養つて息子とし、戊搜と名付けた。西晋の恵帝の元康六年（二九六）、戊搜は齊万年の乱を避け、部族四千家を率いて百頃に帰り、同地を保つと、自ら輔國將軍、右賢王と号した。関中の人士で（齊万年の乱を避けて）流浪した者たちの多くが戊搜を頼つたので、戊搜は彼らを受け入れて安堵し、去りたいと願うものがあれば、すぐに、これを護衛し郷里に還させた。愍帝は、戊搜を驃騎將軍、左賢王に任命した。この当時、南陽王の保が上邽にいたので、愍帝は、戊搜の息子の難敵を征南將軍に任命した。建興五年（三一七）、戊搜が死亡し、難敵が位を継承した。難敵は、堅頭と部曲を分割し、左賢王を号して下辯に駐屯した。いっぽう、堅頭は右賢王を号して河池に駐屯した。元帝の太興四年（三二一）、前趙の劉曜が難敵を征伐したため、難敵は堅頭とともに晋寿に逃走し、成漢の李雄に臣従したが、劉曜が撤退すると、難敵はふたたび仇池に戻つた。

成帝の咸和九年（三三四）、難敵が死亡し、息子の殺が即位した。殺は、自ら使持節、龍驤將軍、左賢王、下辯公を

号した。毅は、堅頭の息子槃を使持節、冠軍將軍、右賢王、河池公に任じた。咸康元年（三三五）、毅は西晋に遣使して蕃臣を称したので、西晋は、毅を征南將軍、槃を征東將軍に各々任命した。咸康三年（三三七）、毅の族兄の初が毅を襲って殺害し、毅の民を掌握し、自ら即位して仇池公となり、後趙の石虎に臣従した。その後、初は東晋の穆帝に遣使して蕃臣を称した。永和三年（三四七）、初を使持節、征南將軍、雍州刺史、平羌校尉、仇池公に任命した。また、初の息子の国を、鎮東將軍、武都太守となした。永和十年（三五四）、改めて初を天水公に封じた。永和十一年（三五五）、毅の小弟の宋奴が、姑子の梁武王に命令し、はべっている時に剣で初を殺害させた。このため、初の息子の国は、部下達を率いて梁武王と宋奴を誅殺し、自ら即位した。東晋の征西將軍桓温は、上表して国を鎮北將軍、秦州刺史、平羌校尉とし、国の息子の安を振武將軍、武都太守とした。永和十二年（三五六）、国の従父楊俊がまた国を殺して自ら即位したので、安は前秦の苻生のもとに亡命した。俊は遣使して晋に帰順した。升平三年（三五九）、俊を平西將軍、平羌校尉、仇池公とした。升平四年（三六〇）、俊が亡くなり、息子の世が即位した。また世を冠軍將軍、平羌校尉、武都太守、仇池公に任じた。廢帝（海西公）の太和三年（三六八）、世を征西將軍、秦州刺史にうつし、世の弟の統を寧東將軍、武都太守とした。太和五年（三七〇）、世が死亡し、統は世の息子の纂を廢して自ら即位した。纂は、またの名を徳といい、支持者を糾合して統を殺し、東晋の簡文帝のもとに使者を派遣し、実情を申し述べたので、再び纂を平羌校尉、秦州刺史、仇池公とした。咸安元年（三七二）、前秦の苻堅は楊安と苻雅らを派遣し、纂を討伐させ、勝利を収めた。その民衆を関中に移住させ、百頃の地を無人化した。纂はのちに楊安に殺された。

宋奴が亡くなった時、二人の息子、佛奴と佛狗は関中に逃走した。苻堅は、佛奴を右將軍、佛狗を撫夷護軍とした。その後、苻堅は娘を佛奴の息子定の妻とし、定を尚書、領軍將軍に任命した。孝武帝の太元八年（三八三）、苻堅が淮南（淝水の戦）で敗北したため、関中は混乱した。このとき定は力を尽くして（義父の）苻堅に奉仕した。しかし、苻

堅が死亡したので、定は家族を率いて隴右に走り、治所を歷城に移した。城は西縣の境界にあり、仇池から百二十里離れていた。定は、穀物倉庫を百頃に設け、氐羌と東晋（の民）を糾合し、千余家を掌握して、自ら龍驤將軍、平羌校尉、仇池公を号し、東晋の孝武帝に対して蕃臣を称した。そこで、孝武帝はすぐさま、定の自称を承認して、その称号を与えた。定が孝武帝に対し、天水西縣と武都の上禄を譲り受け、仇池郡としたいと求めると、孝武帝はこれを許可した。太元十五年（三九〇）、孝武帝はまた定を輔国將軍、秦州刺史とした。定はすでに征西將軍と自署していた。孝武帝は、定を持節、都督隴右諸軍事、輔国大將軍、開府儀同三司に昇進させ、校尉と刺史の官職は、以前のとおりであった。その年、定は、天水の略陽郡に進撃して同地を平定し、ついに秦州の地を領有して、自ら隴西王を称した。太元十九年（三九四）になって、定は隴西の鮮卑族、乞伏乾歸（西秦）を攻撃したが、定の軍勢が敗北し、定は殺された（『晋書』卷一二五乞伏乾歸伝）。定には子供がいなかったので、佛狗の息子盛が、まず監国となって仇池を守り、王位を継承し、自ら使持節、征西將軍、秦州刺史、平羌校尉、仇池公を号した。盛は、定に武王のおくり名を贈った。盛は、諸々の四山の氐、羌を分割し、二十部護軍とし、それぞれを鎮戍となして、郡県は置かなかった。安帝の隆安三年（三九九）、盛は遣使して東晋の蕃臣を称し、特産物を献上した。安帝は、盛を輔国將軍、平羌校尉、仇池公に任じた。元興三年（四〇四）、桓玄が東晋王朝を補佐し、盛を平北將軍、涼州刺史、西戎校尉に昇進させた。義熙元年（四〇五）、後秦の姚興が盛を討伐しようとし、盛は恐れ、姚興のもとに息子の難当を人質として差し出した。姚興は將軍の王敏を派遣して東晋の城を攻撃したので、梁州の別駕、呂瑩は、盛に救援を要請した。盛はそこで援軍を派遣したが、軍勢が濫口に至ると、王敏は撤退した。東晋は、盛を都督隴右諸軍事、征西大將軍、開府儀同三司に任命した。この時、益州刺史の毛璩が桓玄を討ったので、桓玄の設置した梁州刺史の桓希は敗走し、漢中が政治的空白地帯となった。そこで、盛は兄の息子で平南將軍の撫を派遣して漢中を守らせた。義熙三年（四〇七）、また東晋は盛を使持節、北秦州刺史とした。

盛はまた、將軍の苻宣を行梁州刺史として派遣し、撫と交代させた。義熙九年（四一三）、梁州刺史の索邈が南城に駐屯したので、苻宣は帰還した。宋の高祖武帝（劉裕）が即位すると、盛を車騎大將軍に進め、侍中の位を加えた。永初三年（四二二）、盛を改めて武都王に封じ、長男の玄を武都王世子となして、前將軍の号を加え、難当を冠軍將軍、撫を安南將軍にそれぞれ任命した。盛は、王位を継承して三十年、文帝の元嘉二年（四二五）六月に死亡した。このとき盛は六十二歳であつた。盛に対して内輪でおり名を贈つて、惠文王といった。（子の玄が王位を継承した。）

玄のあざなは黃眉といい、自ら使持節、都督隴右諸軍事、征西大將軍、開府儀同三司、平羌校尉、秦州刺史、武都王と号した。玄は宋朝の蕃臣を称してはいたが、東晋の安帝の年号義熙を奉じていた。玄は士人を優遇し、流民と土民の双方から慕われた。安南將軍の撫は文武の知略を兼ね備えていたので、玄は撫を受け入れることができず、元嘉三年（四二六）、撫の息子が殺人を犯したことを理由に撫も併せて誅殺した。太祖文帝は、玄を使持節、征西將軍、平羌校尉、北秦州刺史、武都王とした。玄はそこで、東晋の義熙の年号を改めて宋朝の元嘉の正朔を奉じた。初め、盛は玄に「私はすでに年老いたから晋の臣下であるが、おまえは（若いのだから）宋の皇帝によく仕えるべきだ」と言つた。そのため玄は宋の正朔を奉じたのである。文帝は盛に驃騎大將軍の称号を追贈した。他の称号はそのままであつた。元嘉六年（四二九）六月、玄が死亡した。玄に対し内輪で孝昭王という諡を贈つた。

玄の弟の難当は、玄の息子の保宗（またの名を羌奴という）を廢し、自ら即位し、使持節、都督雍・涼諸軍事、秦州刺史、平羌校尉、武都王を号した。文帝は、難当を冠軍將軍、秦州刺史、武都王とした。元嘉九年（四三二）、文帝は、難当の称号を征西將軍に昇進させ、持節、都督、校尉の称号を加えた（『宋書』卷五、文帝紀、元嘉九年六月乙未条）。難当は、保宗を鎮南將軍に任命し、宕昌に駐屯させた。また、次男の順を鎮東將軍、秦州刺史とし、上郡を守らせた。保宗は、難当の襲撃を画策したが、そのことが露見し、難当によつて捕えられ収監された。これより先、四方の流民が

許穆之と郝恢之の二人を擁して難当に身を投じ、許穆之と郝恢之は二人とも改姓して、姓を司馬とした。許穆之は自ら飛龍と名のり、郝恢之は自ら康之と名のり、晋王室の近親であると述べた。康之は、その後、殺された。元嘉十年（四三三）、難当は、益州刺史の劉道濟が蜀の民の人情を失ったので、軍隊を派遣して飛龍を支援して蜀を攻撃させた。

しかし、劉道濟は飛龍を撃破し、これを斬殺した。この時、梁州刺史の甄法護の統治は不条理で、文帝は梁州刺史として蕭思話を派遣し、甄法護と交代させようとした。難当は蕭思話がまだ梁州に到着しないので、甄法護が降伏するだろうと思い、挙兵して梁州を襲撃し、白馬を破り、晋昌太守の張範を捕えた。甄法護は、参軍の魯安期、沈法慧らを派遣して難当を拒んだが、彼らはみな敗走した。難当はまた、建忠將軍の趙進に葭萌を攻撃させ、晋寿の太守范延期を捕えさせた。その年の十一月、甄法護は、梁州城をすて、洋川に亡命した。難当はついに漢中の地を領有した。難当は、氐族の苻粟持を梁州刺史としたが、苻粟持が、その凶暴さゆえに殺害されたため、司馬の趙温を代わりに梁州刺史とした。十（一）年正月、蕭思話は、司馬の蕭承之を先遣隊として、楊難当を討伐させた。蕭承之は、進撃するところで勝利を取め、ついに梁州を平定した。詳細は蕭思話の伝記に記されている（『宋書』卷七八、蕭思話伝<sup>1</sup>）。

（元嘉十一年）四月、難当は遣使して上表し、謝罪して言った。

「わたくしは聞いております。生れつき持ち合わせた徳は、人みな同じであり、ただその栄枯盛衰が分かれ、異なる運命に遭遇すると。私が身に余る天子の恩を受けるに至っては、まことに感謝の言葉も見つかりません。そもそも狂人と聖人では歩む道が異なりますが、なお内には忠誠心を抱いております。まして君主や親といった無二の存在に対して、期せずして感応するものです。私は常に力を尽くして、陛下の聖徳に報いようとしておりました。しかし真心は通ぜず、私に対する謗りの声が広まりました。梁州刺史の甄法護は、私を謗り、司馬飛龍を派遣して西蜀を乱し、いたるところで事実でないことを言いふらし、人を罪に陥れました。彼らの言うことは一つとして事実ではありません。万里

にわたり、無道であることは自明で、流言飛語（風塵之声）は日増しに甚だしくなりました。そうした逆賊とともに生きるよりは、むしろ潔く死を選ぼうと（與其逆生、寧就清滅）、文官も武官ともに憤慨し、私はそれを制止できませんでした。そこで私は参軍の姚道賢に書簡をもたせ、梁州刺史の蕭思話のもとに参上させ、ついでまた御史台に赴かせて罪に服するつもりでした。しかしながら姚道賢は西城にまで至ると、守備兵に殺害されてしまいました。使者の所持品は隠蔽され（行李蔽擁）、日の目を見ることはありませんでした。一方、甄法護は恐れおののいて、風評を聞いて逃亡しました。そこで、私はすぐに軍を撤退させ、いささかの侵略の罪を犯すことなく、少数の守備兵を一時的に留めて、宋朝の軍隊との合流を待ちました。その数十日後に宋の軍隊が到着しました。私たちの守備兵は弱小であり、おびえて任務に耐えられないと思い、さらに輕装兵を派遣し、ともに宋軍に合流しようとなりました。しかし、彼らは秦の流民に遭遇すると、郷土をなつかしみ、右往左往するばかりで（行將既旋）、統制が取れず、私に阻止する力もなく（由臣約防無素）、このような失敗を犯した次第です。

私どもは、もともと歴代、宋朝の蕃臣として、皇帝陛下のことさらの寵遇を得ておりました。初めを正すことが、天子の教化の基礎であり（王化始基）、天道にしたがい、命を委ね（順天委命）、名を求めて義を期す（要名期義）というようなことは、今日には存在しないことですが、どうしてもして妖妄なことにかこつけて、成功をきずつけることができましょう。このような事態は明白であり、どうか陛下におかれては賢明な判断をくだされるようお願い申し上げます。ただ私のささやかな志が陛下のもとに届かず、私の行為が忠誠と違い、そのうわさが朝廷に伝わり、軍隊を出動させる事態を招きましたことは、私として深く恥じ入るところで、その罪はまさに誅罰にあたいます。未開の地の果てから、切にせつに罪を請い、謹んで兼長史の斉亮を派遣して担当部署の命令をお聴きし、併せて私どもに宋朝から授与されておりました十一の符策を奉還させていただきます。伏して陛下のおほしめし（天旨）を受けたいと存じます。」



宋朝の文帝は、楊難当が辺境の末裔なので、勅書を下して言った。「楊難当の上奏文は、このようであり、以前の罪を後悔し、謝罪している。寛大な心で許し、あわせて特別に章旗、符節（楊難当が返上した符策）は戻してやろう。」

元嘉十二年（四三五）、難当は、保宗を釈放して童亭に駐屯させた（『資治通鑑』卷一二二）が、保宗は（北魏に）逃亡した。北魏（索虜）の皇帝、太武帝（拓跋燾）は保宗を都督隴西諸軍事、征西大將軍、開府儀同三司、平羌校尉、南秦王として、上邦を襲撃させた。そのとき難当の息子順は防禦に失敗し、退却した。北魏太武帝は保宗を雍州刺史とし、下辯を守らせた。元嘉十三年（四三六）三月、難当は自ら即位して大秦王となり、建義という年号を称し、妻を王后とし、世継ぎを太子として、百官を置いた。その官僚制度はすべて宋朝（天朝）の制度にならった。しかし、なお難当は宋朝を奉り、朝貢は絶えなかった（『資治通鑑』卷一二三）。元嘉十七年（四四〇）、難当の国内は、ひどい日照りにみまわれ、災害が多かったので、難当は、王号をとり下げ、大秦王から武都王に戻した（『宋書』卷五、文帝紀、『資治通鑑』卷一二三）。

元嘉十八年（四四一）十月、難当は国をあげて南方に侵攻し、蜀の地を領有して漢中への進軍を図った。そこで宋朝は建忠將軍の苻冲を東洛から出撃させ、難当の侵攻を防がせた。だが、梁州刺史の劉真道は苻冲を迎撃し、これを斬った。十一月、難当は葭萌の戦鬪に勝ち、晋寿太守の申坦を捕えて、ついに涪城を包囲した。しかし巴西太守の劉道錫が籠城して守りを固めたので、難当は十日あまり攻城したが勝つことができず、帰還した（『資治通鑑』卷一二三）。元嘉十九年（四四二）正月、宋の文帝は、龍驤將軍の裴方明、太子左積弩將軍の劉康祖、後軍參軍の梁坦の甲士三千人を派遣し、また、荊州と雍州の兵を出撃させて難当を攻撃した。荊州と雍州の兵は、梁州刺史の劉真道の指揮下に置いた（『資治通鑑』卷一二四）。五月、裴方明らは漢中に到達し、長駆して進軍した。劉真道は武興に至り、偽建忠將軍の苻隆を攻撃し、これに勝利した。安西參軍の韋俊、建武將軍の姜道盛は別の道から下辯に向かい、劉真道もまた司馬の夏



侯穆季を西に向かわせ白水を奪取させた。難当の息子で雍州刺史の順、建忠將軍の楊亮が防戦したが、宋軍の勢いを聞き、恐れて逃亡した。閏月、裴方明は蘭臯に至り、難当の鎮北將軍の苻義德、建節將軍の苻弘祖は、一万あまりの兵で陣を築き、裴方明の攻撃を防ごうとした。しかし裴方明はこれを撃破し、苻弘祖を斬り、二千余人を殺した。このため苻義德は遁走した。（裴方明が勝利したので）天水の任愈之は郃曲を率いて宋朝に帰順した。難当の世継ぎで撫軍大將軍の和は、修城に立てこもったが、裴方明もまた軍を派遣し、任愈之を率いて和を攻め、大いにこれを破った。その結果、難当は妻子を連れて北魏に亡命した（『魏書』卷四世祖紀下）。難当はその後、北魏で亡くなった（『魏書』卷一〇一氏伝）。安西參軍の魯尚期は、難当を追って寒峽から出撃し、建節將軍の楊保熾、安昌侯の楊虎頭を生け捕りにした。初め、難当は、第二子の虎を鎮南將軍、益州刺史に任じて陰平を守らせていた。だが、虎は父親が北魏に逃亡したことを聞くと逃げ帰り、下辯に至った。裴方明は、息子の蕭之を派遣して虎を要撃させて捕え、虎を京師に護送した。虎は建康の市場で処刑された。こうして仇池は平定された。

宋の文帝は、輔国司馬の胡崇之を龍驤將軍、秦州刺史、平羌校尉とし、仇池を守らせようとした。これに対し、北魏の太武帝（索虜の拓跋燾）は、安西將軍の吐奚弼、平北將軍の拓跋斉らに二万の軍勢を率いさせて派遣し、胡崇之を迎撃した。元嘉二十年（四四三）二月、胡崇之は濁水に到達した。そこは仇池を去ること八十里の地であった。同地において、胡崇之は、北魏の拓跋斉らと遭遇し、戦ったが敗北した。生き残った兵士は、漢中に逃げ帰った（『資治通鑑』卷一二四）。

三月、先の鎮東司馬の苻達、征西從事中郎の任朮らが義拳の兵をあげ、保宗の弟の文徳を君主に戴いた。北魏の拓跋斉は、兵士の蜂起を聞くと逃走したが、苻達はこれを追撃し、拓跋斉を斬り殺し、白崖を拠点にして、国境の陣営を手分けして平定した。文徳は自ら使持節、都督秦・河・涼三州諸軍事、征西大將軍、秦・河・涼三州牧、平羌校尉、仇池

公を号し、戦勝文を竿に付け（露板、露布）、宋の朝廷に報告した。

宋の文帝は、文徳に勅書を下して言った。「近頃、校尉仇池公（楊難当）は、北魏に上表し、勝手な行動をとり、仇池を襲撃した。宋の将兵は傷つき、多くの民は塗炭の苦しみにあつた。そこで朕は、ねんごろに西方をかえりみ、憐みの氣持を心に抱いた。楊文徳は代々誠実で忠順であり、その真心は国家を思いやり、義拳の兵を糾合して率い、凶暴で醜惡な敵を殺しつくした。その鋒旗の向かうところ、敵軍は一人残らず殲滅された。悪い氣や邪氣は澄み清められ、氐羌の国境地帯は、みな安寧となつた。この功績を思えば、まことに喜ばしい。それゆえ、すぐに使者を派遣して文徳を慰勞し、朝廷の命令を宣示し、あわせて梁州刺史の申坦に勅書を下し、随時に文徳を応援できるようにさせよ。」文帝はまた、文徳に勅書を下して言った。「思うに勲功を顕彰し記録することは、国家の制度であり、恩賞を受ける場合は速やかにして時間をおくべきではない。楊文徳の志氣は果敢であり、文武を兼ね備え、機会に乗じて人知れず発奮した。殊勝な功績が頻繁に重なり、戦勝を告げ、忠誠を示し、遠方から捕虜を朝廷に献上してきた。事態が窮迫し、すでに親の亡き状態の中（朝無暫土、樹難自肅<sup>④</sup>）、文徳の功績は非常に顕著であり、朕はとても喜んでゐる。楊氏の祖先は西方辺境の防備に尽力し、その忠義は代々、積み重なっている。楊氏先祖の残した功績をよく引き継ぎ、寵愛と榮譽を受けるのがよからう。楊文徳を使持節、散騎常侍、都督北秦・雍二州諸軍事、征西大將軍、平羌校尉、北秦州刺史に任じ、武都王に封ずることにしよう。」（『宋書』卷五、文帝紀、元嘉二十年七月）。

任胙の祖父の岐、伯父の祚、父の綜はみな楊氏に仕え、諮議從事中郎となつた。任胙には大きな志があり、文徳はこれを左司馬とした。文徳は宋朝の命令を受け、進軍して茄蘆城に駐屯したが、元嘉二十五年（四四八）、北魏に攻撃されたため、漢中に逃走した。このとき劉駿（後の世祖孝武帝）が襄陽に駐屯しており、文徳を拘束して建康に送還した。文徳は防禦に失敗した咎により免職となり、爵位と領地を削られた（『資治通鑑』卷一二五）。

元嘉二十七年（四五〇）、宋朝の軍隊が北伐を行い、文徳を輔国將軍に起用した。文徳は軍を率いて漢中より西に進み、汧、隴を震撼させた。文徳の宗族、楊高は、陰平、平武にいる諸々の氏族を平定し、唐魯橋に立てこもり、文徳の進軍を拒んだ。文徳は、水陸双方から楊高を攻撃し、大いにこれを撃破した。楊高の兵士は散り散りに逃走した。楊高は羌族のもとに遁走したので、文徳はこれを追撃して黎印嶺に至った。楊高は、単身で羌族の仇阿弱の家に身を投じたが、文徳は追撃してこれを斬殺した。こうして陰平、平武はすべてが平定された。また、宋朝は文徳を派遣して啖提氏を攻撃させたが、文徳は勝てなかった。梁州刺史の劉秀之は文徳を拘束して荊州に送還し、文徳の従祖兄の頭を茹蘆に駐屯させた（『資治通鑑』卷一二五）。荊州刺史南郡王の義宣が反乱を起こした時、文徳はそれに同調せず、殺害された。孝武帝は、文徳に追贈して、征虜將軍、秦州刺史とした。

孝建二年（四五五）、孝武帝は、保宗の息子、元和を征虜將軍とし、頭を輔国將軍とした。元和は、楊氏の正統であり、多くの氏族は、互いに元和を王に推戴することを望んでいた。しかし、元和は年若く、才能も乏しかったので、部族を統轄することができなかった。頭の母、妻、子弟はみな北魏に捕えられていた。頭は宋朝に対して真心をささげ、従順であったが、宋の朝廷は頭を重用しなかった。朝廷は元和の称号と位を承認せず、仇池部族はまだ定まった君主を得ていなかった。

そこで、雍州刺史の王玄謨は上表して皇帝に申しあげた。「勅書を授かりましたので、私は使者を派遣し、楊元和と楊頭にお互いの様子をたずね、信頼できる情報を朝廷にお届けしました。また、中軍行參軍の呂智宗に信書をもたせ、自らも使者を智宗に従って派遣しました。頭が智宗に語るには、『近頃、私は家を破産させて、国のために尽くしました。母、妻、子弟はみな北魏に拉致されました。孝道をかえりみず、力をつくして辺境を守り、忠義をつくし、誠をつくしてまいりましたが、私の働きはいまだに朝廷に知られておりません』と。もし、元和が王位を継承しましたら、元

和に王位と爵位を授けるのがよろしいと思います。もし、元和が年若く、大任に堪えられないというのであれば、別人に委ねることができましょう。近頃の公私のみだれ、華・夷対立の原因は、みな、これに由来します。わたくしは伏して、おたずね致しますが、頭は元嘉以来、じつに宋王朝に忠誠をつくし、親を捨て、愛する人を捨てております。これは、まことに立派なことです。氏族と羌族は、遠隔の地に居り、また虜（北魏）と非常に近いたため、彼らに対する統制をきつくすると、たちどころに反発しますし、緩くするとすぐに恨みます。頭の人に語る内容を見ますと、仇池公の地位を希望しているわけではなく、西秦州仮節の職を希望しているだけでございます。私の意見でございますが、氏羌は漢川を守り、北魏からの侵攻をなくさせることです。頭はじつに力があり、四千戸の荒れ果てた州は、ほとんど惜しむにたりません。元和は年若く、ひよわで、今はまだこれに政治を委ねられないとしても、数年後には必ずや後継者の任に堪えられるでしょう。その時には元和を用いることは難しくありません。元和の能力が適わなければ、氏羌はすぐに頭に帰順するでしょう。茹蘆が守れなければ、漢川もまた統治することはかなわないでしょう。」

しかし、孝武帝は許さなかった。その後、元和を擁立して武都王となした。元和は白水を治めたが、独立することができず、また北魏に逃亡した。元和の従弟、僧嗣が、また自ら即位し、茹蘆に帰還して同地に駐屯した。そこで、僧嗣を寧朔將軍、仇池太守とした。泰始二年（四六六）、太宗明帝は勅書を下して言った。「僧嗣は、遠方にあつて西の境界を守り、代々、宋朝に対して厚く忠誠を誓ってきた。僧嗣の善行を顕彰し、その義と節を明らかにするのがよろしい。僧嗣を、冠軍將軍、北秦州刺史、武都王に任ずる。太守の位はもとのままとする。」（『宋書』卷八、明帝紀、泰始二年七月丁酉）。

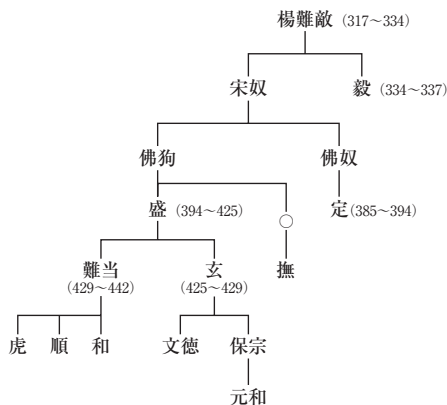
泰始三年（四六七）、明帝は、僧嗣に持節、都督北秦・雍二州諸軍事を加え、称号を征西將軍に昇進させた。（『宋書』卷八、明帝紀、泰始三年四月乙未）校尉と刺史の称号は以前のとおりとした。僧嗣が亡くなり、従弟の文度がまた自ら

即位した。泰豫元年（四七二）、後廢帝は、文度を龍驤將軍、略陽太守とし、武都王に封じ、さらに龍驤の將軍号を改めて寧朔將軍とした。元徽四年（四七六）、後廢帝は、文度に（都）督北秦州諸軍事、平羌校尉、北秦州刺史の称号を加えた。將軍の称号は以前のとおりであった。文度は、弟の龍驤將軍文弘を派遣して（北魏領となっていた）仇池を攻撃し、北魏の守備兵を蘭臯で打ち破った（『資治通鑑』卷一三四）。

昇明元年（四七七）、順帝は勅書を下して言った。「優れた褒賞は条理があり、まことに国家の制度を明らかにする。

論功行賞はこのように明らかであり（疇庸斯炳）、史書に掲載する。（都）督北秦州諸軍事、寧朔將軍、平羌校尉、北秦州刺史、武都王の楊文度一門は（皇帝からの）輝かしい寵愛をうけ、代々、辺境に榮譽を輝かした。忠義の成果はすでに明らかであり、その才能と勲功はともに顕彰された。また龍驤將軍の楊文弘は、（文度のたてた）方針に慎み深く協力し、自ら陣頭に立って民や兵士を鼓舞し、百頃に威光を伸ばし、蘭臯を席捲した。その立派な功績は、喜びと感嘆に値する。爵位を授け、その勲功に報ずるのがよからう。文度に対しては使持節、都督北秦・雍二州諸軍事、征西將軍の称号を授け、刺史、校尉の称号は以前のままとする。また、文弘は輔國將軍、略陽太守に任ずる。」（『宋書』卷十、順帝紀、閏十二月辛丑）。

その年、北魏が茹蘆を破り、文度は殺された。そこで文度に本官を追贈し、散騎常侍を加えた。文弘を（都）督北秦州諸軍事、平羌校尉、北秦州刺史とし、文度の後を継がせて武都王に封じた。將軍の称号は以前のとおりとした。文弘は武興に退却して統治した。



楊氏系図 (1) ※『宋書』氏胡伝より作成  
※在位年は三崎良章2012を参照した

注

(1) 『宋書』卷五、文帝紀、元嘉十一年四月条によれば、蕭思話が楊難当を破り、梁州を平定したのは、元嘉十一年(四三四)のことである。この事件について同書卷七八の「蕭思話」伝は詳細であるが、全体に年月を一年早くして記述する。そのためか、『宋書』氏胡伝では、元嘉十一年正月の事件を元嘉十年正月のこととし、元嘉十年十一月の記事のあとに続けて記述するという不手際を生じた。以上の史料のほか、『資治通鑑』卷一二二を参照して事件の経過をみると、次のようになる。元嘉十年三月、梁・南秦二州刺史の甄法護の悪政を聞いた文帝は、一族中より蕭思話を起用して、甄法護と交代させようとした。同年十一月、仇池国の楊難当は、蕭思話の到着を待たずに漢中(梁州)に侵攻し、占領する。甄

法護は逃亡した。元嘉十一年正月、蕭思話は先遣隊として蕭承之の軍隊を梁州(漢中)に派遣した。彼らは難当の軍勢と衝突し、交戦四十日で、難当軍を撃破した。楊難当は敗北。同年四月、宋軍は漢中を奪回した。一方、楊難当は同年四月に使者を派遣して宋朝の文帝に「謝罪文」を奉り、おのれの立場を説明し、許しを請うている(氏胡伝)。

(2) 「正始之道、王化之基」(毛詩序、周南、召南)、「順天者存在、逆天者亡」(『孟子』離婁上)。

(3) 「乃眷西顧」は、『詩経』大雅、文王之什、皇矣が出典。

(4) 本文中の「朝無暫土」については、「敝邑之急、朝不及夕」(『左伝』襄公十六)を、「樹難自肅」については、「樹欲静而風不止(子が親を養おうとしても、親は死んでこの世にいないというたとえ)」を出典として解釈した。



## 『南齊書』卷五十九、氏伝、宕昌伝

氏

氏族の楊氏は、苻氏と同様に略陽の出身で、漢の時代より代々仇池に住み、その地は百頃と号していた。後漢の建安年間中（一九六―二二〇）、百頃の氏王がいたが、それが、この楊氏の氏族である。晋の時代、楊茂琰がおり、のち次第に強盛となった。そのことは前代の史書（『宋書』氏胡伝）に記されている。仇池の四方には（険しい山が）壁のようにそびえ立っていて、それがちょうど樓閣やぐらとなり、敵を撃退する天然の要塞を形成していた。山の高さは、みな数丈であった。二十二（曲り）の道があり、断崖の縁にすがって登ることができた。東西の二つの門があり、まがりくねった山道が七里ほどつづいた。頂上には、小高い丘があり、泉がわき出ていた。氏族は、上方の平地に宮殿、果樹園、菜園、倉庫を建て、貴賤の別なく、みな土壁で板葺きの屋根の家屋を造った。治所は、洛谷といった。

宋の元嘉十九年（四四二）、龍驤將軍の裴方明らが氏族を討ち、仇池を占領したが、その後、北魏に攻撃されて領土を失った。氏王楊難当の従兄の息子、文徳は茹蘆で民を集め、宋朝から爵位を与えられた。文徳が死亡すると、従弟の僧嗣と文慶が相次いでこれに代った。難当の族弟、広香はすでに北魏に逃亡していた。元徽年間（四七三―四七七）、北魏は文慶を攻撃して殺害し、広香を陰平王、茹蘆鎮主とした。文慶の従弟、文弘は白水太守となり、武興に駐屯した。朝議は、文弘を輔国將軍、北秦州刺史、武都王、仇池公とした。

太祖高帝（蕭道成）は即位すると、異民族を懐柔したいと思った。高帝は、建元元年（四七九）、勅書を下して言った。「むかし絶域の国は人質を中国に入れ、前代の歴史書に麗しいことと称えられた。風俗を異にする異国が、真心から中国を慕って来ること（内款）、その評判は、しばしば記録されている（声流往記）。北魏（＝偽虜）の茹蘆鎮主、陰

平郡公の楊広香は、同族に対して怨恨の心を抱き、仲間たちと蜂起し、宋朝の時代、ついにその地をあげて敵（北魏）に降伏した。茄蘆は守りを失い、華陽（漢中、巴・蜀）は騒然となった。しかし近頃、ひとりの使者を派遣し、わが皇帝の威光を宣揚し、つづいて広香らが祖先たちの忠誠心を追想して、わが維新の教化をあおぎ、肌ぬぎになって恭順の意をしめし、降伏を請願して千里の領土を奉還した。氏羌のさまざまな種族も、みな同じく帰順してきた。いまこそ彼らを受け入れ、あわれんで、手あつく待遇するのがよろしかろう。楊広香は過ちを反省し、正道に返ったのであり、特別の取り計らいで褒美を授けよう。部曲の酋長たちは、名分に応じて褒賞をあたえよう。」そして、高帝は広香を（都）督沙州諸軍事、平羌校尉、沙州刺史に任じた（『南齊書』卷二高帝紀下、建元元年七月丙辰、『資治通鑑』卷一三五、建元元年七月）。ついで高帝は、広香の称号を征虜將軍に昇進させた。

梁州刺史の范柏年が誅殺されたので、彼の親任する將軍李烏奴は、恐れて逃亡し、叛乱をおこした。楊文弘が李烏奴を受け入れた。李烏奴は、亡命した千余人を率いて梁州を攻めたが、刺史の王玄邈に破られ、ふたたび氏族の中に逃げ帰った（『資治通鑑』卷一三五、建元元年十月、『宋書』卷五十一、崔慧景伝）。荊州刺史の豫章王疑は、軍勢を派遣して李烏奴を討伐しようと、梁州に檄（ふれ文）をまわした。「首尾よく李烏奴を斬殺し、その首を送ってきたならば、本郡（梁州）を賞として与え、烏奴の田宅、事業をことごとく賜与する」と。楊広香には次のような書簡を与えた。

「そもそも、国家興亡は必ずあり、反逆と帰順は常にあることは、古今ともに一貫している。賢者も愚者も、ともに察するものである。梁州刺史の范柏年は、王朝をあざむこうとする考えを抱き、（沈攸之の反乱に際し）どっちつかずの態度をきめこみ、やがて刺史の交代を告げられても、ぐずぐずと命令に従おうとしなかった。最後に、范柏年は李烏奴に謀叛をそそのかし、楊文弘が辺境の諸蛮族を扇動して反乱に加わった。今、范柏年はすでに捕えられて首を曝された。李烏奴は敗北を重ねており、残党の数をみれば、自滅寸前である。今、参軍行晋寿太守の王道寶、参軍事行、北

巴・西新巴二郡太守の任湜之、行宕渠太守の王安會を派遣する。彼らは三千の精銳を率い、風のように速く、すみやかに進撃し、水上を行く時は電光のように素早い。また、輔国將軍三巴校尉の明惠照、巴郡太守の魯休烈、南巴西太守の柳弘称、益州刺史の傅琰に命じ、優れた歩兵、騎兵を選んで馳せ参じさせる。雍州の水軍と歩兵は、魏興に至り、山東の僑居人部隊とともに南鄭で合流する。あるものは墊江に船をうかべ、あるものは劔道に旗を翻し、腹と背中から、つむじ風のように湧き上がり、前と後ろから電撃のように攻撃する。

楊文弘は、反逆者（李烏奴）を受け入れ、常に反乱の温床となつて、外に対しては皇帝の威光を侮り、内に向かつては同族を虐げた。しかし、君（楊広香）は代々王朝に忠義をつくし、理順をよく知り、義兵をおこし、すぐに（齊朝）大軍に呼応し、齊軍とともに前後から李烏奴を討滅し、よく忠勤に励み、さかんに忠誠と節義をたてようとする。沈攸之は、十年分の蓄積を用い、大軍を動員したが、軍隊は境界を攻撃したものの城塞は潰れ、兵士は戦わないうちに自滅した。朝廷は弓箭を消耗させることなく、士民は傷つき、苦しむことはなかった。まして今回の小悪人（烏奴）のごときは取るに足らぬものであり、全滅させるに、どうして手間ひまがかかろうか。私はかたじけなくも、何のとりえもないうままに地方官として赴任し（分陝）、南蕃のことを司ることになった。悪気を清め、けがれを取り除くこと、それを任務とわきまえる。この（荊州の）府庫には、武器は山のように積まれ、旗は林のようにそびえ、兵士は強力で、鋭い武器を蓄え、威力を増す。困難を取り除き、敵を駆除するのに、どうして徴集を待とうか。ただ、小悪人を裁ち切るのに、大きな斧を使う必要なく、蚊や蚋をたたくのに、大勢の力を借りることはない。皇帝の賢明さは、時期に呼応し、皇帝の恩沢は広く地をおおっている。処罰は悪人のかしらだけにとどめ、その他の者の罪は問わない。賞罰の詳細は、別に書き記す。」

そして、預章王疑は、王道寶の歩兵を魏興より出撃させ、軍を分けて墊江をさかのぼらせると、晋寿で合流させた。

太祖高帝は、楊文弘が反乱したので、楊広香の称号を進めて、持節、都督西秦州刺史とした。広香の息子で、北部鎮將軍郡事の呉を、征虜將軍、武都太守とした。また高帝は、楊難当の嫡子、楊後起を持節、寧朔將軍、平羌校尉、北秦州刺史、武都王とし、武興に駐屯させた（『南齊書』卷二高帝紀下、建元二年十一月、『資治通鑑』卷一三五、建元二年十月、十一月）。後起は文弘の從兄の息子であった。

建元三年（四八一）、楊文弘が降伏したので、再び征西將軍、北秦州刺史に任命した。これより先、広香が病死し、氏族の半分は文弘のもとに逃げ、半分が梁州刺史の崔慧景のもとに行った。文弘は、從子の後起を進撃させ、白水に拠点を構えさせた。白水は、晋寿の上流にあり、西は涪の境界に接し、東は益路に沿い、北は陰平と茄蘆に連なり、形勝の地をなしていた。晋寿太守の楊公則は、文弘と後起の動向について（経略之宜）逐一皇帝に報告した。皇帝は答えて言った。「文弘の罪はけつして許すことはできない。これは政略に関する事柄であり、しばらく恩恵を施すのである。もし、おまえが白水を撃破できれば、必ずや、あつく褒美を与えよう。」（『資治通鑑』卷一三五、建元三年七月）。

世祖武帝は即位すると、楊後起の称号を冠軍將軍に昇進させた。永明元年（四八三）、征虜將軍の楊旻を沙州刺史、陰平王とした。（『資治通鑑』卷一三五、永明元年二月）將軍の称号はもとのままであった。永明二年（四八四）、八座の役人が上奏して申し上げた。「楊後起はつとめて、斉朝の徳を慕って国境の城門に参上しようとしており、その忠義は辺境において顕著であります。」そこで、武帝は、後起の称号を征虜將軍に昇進させた。永明四年（四八六）、後起が死亡した。（『資治通鑑』卷一三六）武帝は勅書を下して言った。「後起は、急に倒れ、死没した。いたましく悲しい。辺境地帯を統御するために、後継者の選拔を考えねばならない。行輔国將軍、北秦州刺史、武都王の楊集始は、才幹あり、落ち着きがある。心は忠義にあふれ、必ず辺境を平穩にし、民を安寧にして、皇帝の教えと威嚴を宣揚できるだろう。それゆえ、楊集始を持節、輔国將軍、北秦州刺史、平羌校尉、武都王に任命しよう。」武帝はまた、後起の弟後明

を、龍驤將軍、白水太守とし、集始の弟の集朗を寧朔將軍とした（『南齊書』卷三武帝紀、永明四年閏正月丁未）。

永明五年（四八七）、役人が上奏して言った。「集始は、狐を駆りたて、棘を切りそろえ、辺境で皇帝の教化を仰いでいます。母は子をもって貴きとしますので、荣誉と寵愛を授与するのがよろしいでしょう。」そこで武帝は、集始の母親の姜氏を太夫人とし、銀印を与えた。永明九年（四九二）、八座の役人が上奏した。「楊旻は、西方の牧（地方長官）を継承し、内に真心をつくしております。勲章を増やし、遠方を輝かした方がよろしいでしょう。」そこで称号を前將軍に進めた。

永明十年（四九二）、集始が反乱をおこし、氐や蜀の様々な部族を率いて、漢川を襲撃した。梁州刺史の陰智伯は軍主で寧朔將軍の桓廬奴、梁季群、宋□、王士隆ら千余人を派遣して、これを防がせたが、敗北し、退却して白馬を確保した。賊一万余人は、兵士を放って城柵を攻撃し、放火した。桓廬奴は、賊を防ぎ、城を守って死に物狂いで戦った。

陰智伯もまた、軍主の陰仲昌らの歩兵騎兵数千人を派遣して救援した。白馬城の東の千溪橋に至り、互いに離れること数里で、集始らは、力をつくして斉軍を攻撃したので、斉軍は、城の内も外も奮い立って迎撃した。そのため集始は大敗し、十八の陣営が同時に潰走し、数千人が殺され捕えられた。そこで集始は、北魏との国境地帯に逃走した（『魏書』卷一〇一、氐伝、『資治通鑑』卷一三七、永明十年九月）。

隆昌元年（四九四）、先の將軍、楊旻を使持節、（都）督沙州諸軍事、平西將軍、平羌校尉、沙州刺史とした。集始は武興に入り、城をあげて北魏に降伏した。氐族の符幼孫は、義挙の兵をおこして、これを攻撃した。

建武二年（四九五）、氐と北魏が漢中を攻撃した。梁州刺史の蕭懿は、先の氐王、楊後起の弟の息子、元秀に義兵を糾合させたので、氐族はこれに呼応して北魏の糧道を遮断した。北魏もまた、偽南梁州刺史、仇池公の楊靈珍を泥功山に立てこもらせ、防戦させた。元秀が病死したので、符幼孫は、元秀の部族を掌握した。

高宗は勅書を下して言った。「仇池公の楊元秀は、氐王の末裔であり、その心は忠義と勇氣にあふれ、北魏の軍勢が迫っても、その誠心はますます奮い立ち、朝廷の威光をひろく宣揚して諸族を招致した。万里は等しく契りを交し、諸族は相次いで帰順した。楊元秀の真心は顕著であり、まことに喜ぶべきことである。不幸にして、楊元秀は死没し、朕は心から悲しんでいる。そもそも死者には恩を与えるべきである」と、『陽秋（春秋）』も明確に述べている。榮譽ある勲章を楊元秀に授与し、奨励を広めるのがよろしかろう。楊元秀に仇池公を追贈し、称号を持つて帰国させよう。」

氐の楊馥之は、義民を集めて沮水関に駐屯し、白馬の北に城を築いた。集始は、弟の集朗に兵を率いさせ、黄豆で軍を迎撃して防いだが、戦いで大敗した。集始は下辯に逃走し、馥之は武興に立てこもった。北魏の軍勢もついで撤退した。馥之は弟の昌之に武興を守らせると、自ら兵を率いて仇池に拠点を築いた。そこで、齊の明帝は勅書を下して言った。「氐の王の楊馥之は代々忠義を集め、部曲を励まし、彼らを率いて辺境の城塞で功績をあげた。よこしまで醜い反逆者に勝利し、全滅させた。楊馥之はまた、内では朝廷の規律を受け、外では夷狄をなつかせた。真心は明らかで、朕はこれを非常に喜んでいいる。それゆえ楊馥之を持節、（都）督北秦・雍二州諸軍事、輔国將軍、平羌校尉、北秦州刺史、仇池公に任じる」（『南齊書』卷六、明帝紀、建武二年七月、『資治通鑑』卷一四〇、建元二年七月）。

明帝は、沙州刺史の楊昺の称号を進めて安西將軍とした。建武三年（四九六）、昺が死亡したので、明帝は、昺の息子の崇祖を仮節、（都）督沙州軍事、征虜將軍、平羌校尉、沙州刺史、陰平王とした（『南齊書』卷六、明帝紀、建武三年正月、『資治通鑑』卷一四〇、建元二年～三年正月）。

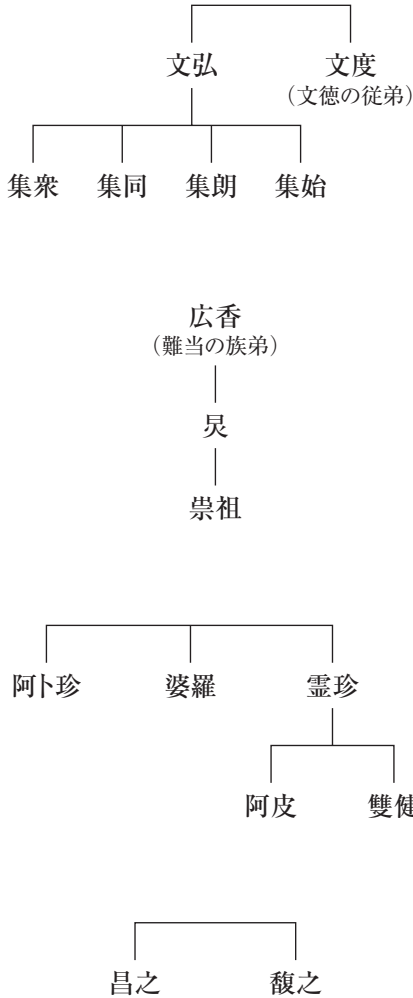
建武四年（四九七）、偽南梁州刺史の楊靈珍が、二人の弟、婆羅、阿卜珍とともに部曲三万余人を率い、城をあげて帰順し、母親と、息子の雙健、阿皮を南鄭に送って人質とした。梁州刺史の陰弘宗は、中兵參軍の王思考に兵を率いさせて救援したが、北魏に捕えられ、婆羅と阿卜珍は戦死した。楊靈珍は、武興で集始を攻撃し、その二人の弟、集同と



集衆を殺した。集始は困り果て、降伏を請願した。(明帝は) 楊靈珍を持節、(都) 督隴右軍事、征虜將軍、北梁州刺史、仇池公、武都王に任命した(『南齊書』卷六、明帝紀、建武四年十一月、『資治通鑑』卷一四一、建武四年八月、十一月)。永元二年(五〇〇)、齊朝は集始を使持節、(都) 督秦・雍二州軍事、輔國將軍、平羌校尉、北秦州刺史に復歸させた。靈珍は、後に北魏に殺された。北魏が仇池を陥落させて以後、仇池の奪回と喪失はくりかえされた。宋は、仇池を郡としたので、齊も氏族を仇池に封じたのである。

# 注

(1) 荊州刺史の沈攸之は、宋朝に取って代わろうとした蕭道成(齊の太祖高帝)に反抗し、反乱をおこしたが、敗北、自害した(四七八年、『宋書』卷七四、沈攸之伝)。



楊氏系圖 (2)

※『宋書』氏胡伝、『南齊書』氏伝より作成

## 宕昌（とうしょう）

宕昌は、羌の種族であった。各々の部族が酋長を有し、汧と隴の間で部衆を領有した。宋朝はその末期に、宕昌王の梁彌機を使持節、（都）督河・涼二州、安西將軍、東羌校尉、河・涼二州刺史、隴西公とした。建元元年（四七九）、齊の太祖高帝は、梁彌機の称号を進めて鎮西將軍とした。また、征虜將軍、西涼州刺史で羌王の像舒彭もまた持節、平西將軍に昇進させた。その後、彼らは叛いて北魏に降伏した。永明元年（四八三）、八座の役人が上奏して申し上げた。

「先の使持節、都督河・涼二州軍事、鎮西將軍、東羌校尉、河・涼二州刺史、隴西公、宕昌王の梁彌機、および先の使持節、平北將軍、西涼州刺史、羌王の像舒彭とは、ともに西方の辺境地帯で著しく功績をあげ、辺境を安寧としました。以前の官爵に戻してもよろしいでしょう。」武帝は勅書を下し、それを許可した（『資治通鑑』卷一三五、永明元年二月）。あわせて隴右都帥の羌王劉洛羊を輔國將軍とした。

梁彌機が死亡した。永明三年（四八五）、武帝は勅書を下して言った。「行宕昌王の梁彌頡は忠心より帰順し、西方辺境で功績をあげたので、爵命を加え、藩屏の手本にするのがよからう。梁彌頡を使持節、（都）督河・涼二州諸軍事、安西將軍、東羌校尉、河・涼二州刺史、隴西公、宕昌王に任命する」（『南齊書』卷三武帝紀、永明三年八月）。（その後）梁彌頡が亡くなった。永明六年（四八八）、行宕昌王の梁彌承を、使持節、（都）督河・涼二州諸軍事、安西將軍、東羌校尉、河・涼二州刺史、宕昌王に任命した（『南齊書』卷三武帝紀、永明六年五月）。

宕昌の使者が軍儀書と伎雑書を求めてきたので、武帝は勅書を下して答えた。「ご要望の軍儀などの九種類の書物は、並びに惜しむものではない。しかし軍器書の種類は非常に多く、届けるのは容易でない。また、内伎（中国の方術、技術）の書は外国では使用に耐えない。秘閣（宮中書庫）に所蔵される図書は原則として外に持ち出すことはできないが、いま特別に勅書を下して『五經集注』と『論語』を王たちにそれぞれ一部を下賜する。」

宕昌の習俗では、虎の皮を珍重した。虎の皮は死者を送るさいに使用し、国内では貨幣がわりになった。

### 参考文献および略号（五十音順）

- 梁・慧皎撰『高僧伝』（中国仏教典籍選刊）中華書局、一九九二年。
- 梁・僧祐撰『出三藏記集』（中国仏教典籍選刊）中華書局、一九九五年。
- 内田吟風一九七一…『蠕蠕伝・芮芮伝訳注（魏書・宋書・南齊書・梁書）』『騎馬民族史1正史北狄伝』平凡社（東洋文庫）。
- 内田吟風一九八〇…内田吟風編『中国正史西域伝の訳註』京都。
- 小田義久一九六八…『沮渠氏と仏教について』『龍谷史壇』第六〇号。
- 小谷・菅沼二〇一三…小谷仲男、菅沼愛語「南朝正史西戎伝と『魏書』吐谷渾・高昌伝の訳注」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』第十二号。
- 北村一仁二〇〇九…「南北朝政権の辺境統治に関する一考察―仇池地区を例として」『研究論集（河合文化教育研究所）』第七集。
- 坂元義種一九六九…「五世紀の日本と朝鮮の国際的環境―中国南朝と河南王・河西王・宕昌王・武都王」『京都府立大学学術報告・人文』第二十一号。坂元義種『古代東アジアの日本と朝鮮』（吉川弘文館、一九七八年）に再録。
- 坂元義種一九七八…『古代東アジアの日本と朝鮮』吉川弘文館。
- 谷口房男一九七六…『晋代の氏族楊氏について』『東洋大学文学部紀要』三〇集史学科篇Ⅱ。
- 塚本善隆一九六一…『魏書釈老志の研究』仏教文化研究所出版部。一九七四年再版。
- 塚本善隆一九九〇…魏収撰、塚本善隆訳注『魏書釈老志』平凡社（東洋文庫）。

杜斗城一九九八・『北涼仏教研究』敦煌叢刊二集、台北、新文豐出版。

馬長寿二〇〇六・『氏与羌』広西師範大学出版社（初版は一九八四年、上海出版社）。

前田正名一九六七・『四世紀の仇池国』『立正大学教養部紀要』創刊号。

前田正名一九六九・『四〇五世紀の姑藏城』『史学雑誌』第七八編第四号。

三崎良章一九八六・『南北朝の对外政策についての一考察―氏族楊氏集団への冊封を通じて―』『史観』第一一四冊。

三崎良章二〇〇六・『五胡十六国の基礎的研究』汲古書院。

三崎良章二〇一二・『五胡十六国―中国史上の民族大移動』新訂版、東方書店。

柳瀬光朗一九八八・『沮渠蒙遜と曇無讖の關係』『大正史学』卷一八。

吉川忠夫・船山徹二〇〇九・『高僧伝』（一）～（四）岩波文庫。